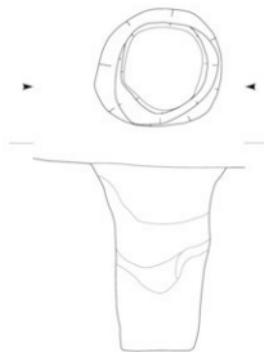


野下・新開遺跡発掘調査報告

—主要地方道小杉婦中線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—



2016年

公益財團法人 富山県文化振興財團
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

野下・新開遺跡発掘調査報告

—主要地方道小杉婦中線改良事業に伴う埋藏文化財発掘報告Ⅱ—

2016年

序

本書は主要地方道小杉婦中線改良事業に伴い、平成25・26年に調査を実施した野下・新開遺跡の成果をまとめたものです。

野下・新開遺跡は、呉羽丘陵と射水丘陵に挟まれた扇状地上に位置し、遠くには東に立山連峰を、北に富山湾を望むことができます。発掘調査の結果、縄文時代から中近世に至る生活の姿が明らかになりました。縄文時代では、一定の間隔をおいて構築された深い穴が確認されました。これは、イノシシやニホンジカなどの動物を落として獲得するために作られた落とし穴と推定され、これにより、当時の狩猟方法の一端が明らかになりました。また、古代では、壁面が被熱で赤色化した焼壁土坑がみつかりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録として現れるこのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所

例　　言

- 1 本書は富山県富山市平岡、境野新地内に所在する野下・新開遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県からの委託を受けて、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	平成25（2013）年7月1日～8月20日
	平成26（2014）年6月11日～7月24日
整理期間	平成27（2015）年4月1日～平成28（2016）年3月31日
- 3 調査に関する全ての資料、出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を付け、「01NJS-地区名」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 本書の本文執筆・編集は島田亮仁が担当した。自然科学分析については専門機関に委託し、その成果を収録した。
- 6 本書で使用している遺構の略号は以下のとおりである。

S D	：溝	S K	：土坑	S X	：倒木痕
-----	----	-----	-----	-----	------
- 7 調査時に地区ごとに付した番号に一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は、遺構の種類にかかわらず連番とする。各地区的遺構番号に加算した数値は次のとおりである。

A地区	：加算せず、B地区	：+300
-----	-----------	-------
- 8 本書で示す座標は平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海拔である。
- 9 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。

遺構	溝	：1/40・1/80	土坑	：1/40	倒木痕	：1/40
遺物	土器・陶磁器	：1/3	石製品	：1/3		
- 10 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 11 遺物は種類に関わらず連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 12 本書に記載される図面・記述の凡例については、以下のとおりに示す。これ以外については、図中に凡例で示した。



- 13 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。その凡例は以下のとおりである。
 - ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
 - ②規模の（ ）内は現存長を表す。
 - ③土器法量の（ ）内は復元長を示す。残存部が少なく計測不可能なものは空欄とした。
 - ④重量はg単位で示す。計測は大きさにより台秤と電子秤を使い分けた。
- 14 発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

中村由克
富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山市埋蔵文化財センター

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	2
3 整理作業の経過と方法	6
4 調査成果の公開	6
第Ⅱ章 位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 縄文時代	11
1 概要	11
2 遺構	11
3 遺物	14
第Ⅳ章 古代以降	26
1 概要	26
2 遺構	26
3 遺物	30
第Ⅴ章 自然科学分析	40
1 A地区放射性炭素年代測定	40
2 B地区放射性炭素年代測定	44
第VI章 総括	47
1 縄文時代の遺構について	47
2 古代の焼壁土坑について	56

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査位置図・遺跡位置図	1	第25図	焼壁土坑出土試料の暦年較正結果	46
第2図	調査区区割図	4	第26図	暦年較正結果	46
第3図	基本層序模式図	5	第27図	落とし穴状土坑集成1	49
第4図	地形図	9	第28図	落とし穴状土坑集成2	50
第5図	周辺遺跡位置図	10	第29図	落とし穴状土坑集成3	51
第6～10図	縄文時代 遺構全体図	16～20	第30図	落とし穴状土坑集成4	52
第11～13図	縄文時代 遺構実測図	21～23	第31図	周辺遺跡発掘調査位置図	53
第14図	縄文時代 遺物実測図	24	第32図	池多東遺跡倒木痕	54
第15～19図	古代以降 遺構全体図	31～35	第33図	推定される風向き	54
第20～22図	古代以降 遺構実測図	36～38	第34図	周辺遺跡の消長	57
第23図	古代以降 遺物実測図	39	第35図	周辺遺跡変遷図	57
第24図	暦年較正年代グラフ	43			

表目次

第1表	既往の調査一覧	2	第11表	古代以降 土坑一覧	39
第2表	調査体制・調査一覧	3	第12表	古代以降 土器・陶磁器一覧	39
第3表	基本層序	4	第13表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 補正值)	
第4表	整理体制一覧	6			42
第5表	周辺遺跡一覧	10	第14表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 未補正值,	
第6表	縄文時代 土坑一覧	25		暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)	42
第7表	縄文時代 倒木痕一覧	25	第15表	測定試料および処理	44
第8表	縄文時代 土器一覧	25	第16表	放射性炭素年代測定および	
第9表	縄文時代 石製品一覧	25		暦年較正の結果	45
第10表	古代以降 溝一覧	39	第17表	倒木痕一覧	54

写真図版目次

図版1	航空写真 (1946・1972年撮影)	図版8・9	B地区 遠景・全景
図版2	航空写真 (2009年撮影)	図版10	B地区 落とし穴状土坑・倒木痕
図版3・4	A地区 遠景・全景	図版11	B地区 溝・焼壁土坑
図版5	A地区 落とし穴状土坑	図版12	B地区 焼壁土坑
図版6	A地区 落とし穴状土坑・土坑・倒木痕	図版13	縄文土器
図版7	A地区 溝・焼壁土坑	図版14	土器・陶磁器・石製品

第Ⅰ章 調査の経過

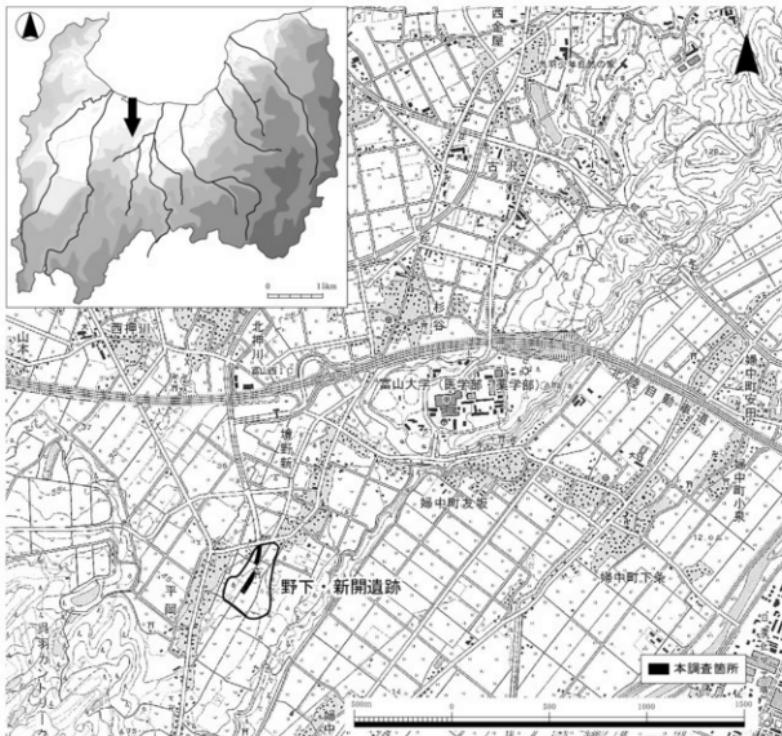
1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

主要地方道小杉婦中線（県道31号線）は、射水市戸破と富山市婦中町長沢を結ぶ地域交通を担う幹線道路として整備されている。北陸自動車道の富山西インターと直結し、物流および市民生活に欠くことのできない生命線として、安全で利便性の高い道路整備が急がれている。

主要地方道小杉婦中線道路改良事業について、平成14（2002）年に、富山県富山土木事務所（現富山県富山土木センター、以下、県土木センター）と婦中町教育委員会（以下、町教委、現富山市教育委員会）による協議が行われ、翌15（2003）年に町教委により事業予定地内の周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、包蔵地）6箇所について試掘調査が実施された。対象面積は19,500m²で、野下・新開遺跡、平岡遺跡の2箇所2,665m²で包蔵地の所在が確認された。

平成17（2005）年、地元の要望により道路法線の変更が行われ、新しい法線について改めて試掘調査実施の必要が生じた。



第1図 調査位置図・遺跡位置図 (1:25,000)

平成21（2009）年、県土木センターと富山市教育委員会（以下、市教委）の協議が行われ、市教委により新しい法線内の包蔵地6箇所についての試掘調査が実施された。対象面積は25,610m²で、野下・新開遺跡、大開Ⅱ遺跡、平岡遺跡、二本榎遺跡の4箇所8,545m²（延べ11,155m²）で包蔵地が再確認され、新たに1箇所の包蔵地が確認された。試掘調査の結果を受け、県土木センターと市教委で協議が行われ、二本榎遺跡^{注1}は市教委が確認調査を実施し、野下・新開遺跡、大開Ⅱ遺跡、平岡遺跡の3遺跡については平成24（2012）年以降、県が本調査を行うこととなった。なお、大開Ⅱ遺跡は、平成25（2013）年3月に野下・新開遺跡と統合された。

平成24（2012）年1月、富山県道路課、富山県教育委員会、公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団）が協議し平岡遺跡他2遺跡の発掘調査を財団が受託することとなり、財団は平成24年度に平岡遺跡2,610m²（延べ5,220m²）について本調査を実施した。

（2）既往の調査

野下・新開遺跡は呉羽丘陵と射水丘陵の間の境野新扇状地に約60,000m²の広さを有している。昭和59年に県営畠地帯総合土地改良事業に伴い遺跡（当時の名称は野下遺跡）の一部が調査されている。この時は繩文時代の落とし穴状土坑や奈良・平安時代の焼壁土坑、歴史時代の道路跡などの遺構が確認されている。

主要地方道小杉婦中線道路改良事業に先立ち、平成21（2009）年度に市教委による試掘調査が実施され、古代の遺構・遺物が確認されている。これを受け、財団が平成25（2013）年度に3,120m²、平成26（2014）年度に2,100m²で本調査を実施した。

遺跡名	分布調査			試掘調査			本調査				
	年度	調査主体	文献	年度	調査主体	調査対象面積（m ² ） （調査対象面積）	文献	年度	調査主体	調査面積（m ² ） （調査対象面積）	文献
野下遺跡	S58	市教委		S59	市教委			S60	市教委	2,100	1
大開Ⅱ遺跡	S58	市教委		H21	市教委	278.8（2,843）		H25	財団	3,120（3,120）	2
野下・新開遺跡	S58	市教委		H21	市教委	251.8（3,524）		H26	財団	2,100（2,100）	3

第1表 既往の調査一覧

文献 1 富山市教育委員会 1985『富山市野下遺跡発掘調査概要』

2 公益財団法人富山県文化振興財団 2014『埋蔵文化財年報』－平成25年度－

3 公益財団法人富山県文化振興財団 2015『埋蔵文化財年報』－平成26年度－

2 発掘作業の経過と方法

（1）調査の経過と方法

調査の作業工程及びその方法・内容は、平成16（2004）年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』に従って実施した。

発掘調査の基準となるグリッドの座標は、国土座標（平面直角座標系第7系：世界測地系）を基に設定した。X74,350,000Y-3,400,000をX 0 Y 0の起点とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2m方眼を基本とし、各グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標で呼称した。発掘範囲は、X12～147・Y 7～64である。但し、調査区の一部であるA地区北端を北東から南西に伸びる農道の一部と、横断する農道並びにB地区南端の南東から北西に伸びる農道の一部分については、調査対象外とした為、農道を除く範囲について調査を実施した。

試掘調査で、調査区東側ほど表土直下で遺構面が確認され、西側に向かって遺物包含層が分布している。この為、表土・耕作土は、調査員立ち会いのもと、東側は草の根を中心とした表層のみを重機

により除去し、西側は遺物包含層直上まで除去した。次に遺物包含層をスコップ等を用い、人力で掘削した。

包含層と遺構検出面まで掘り下げ、ジョレンで精査し、遺構を検出した。検出した遺構は、マーキングをし、1/100の縮尺で遺構概略図を作成した。遺構掘削は移植ゴテやネジリ鍬で行い、まず、小規模な遺構については半截し、大型の遺構については十字アゼを残して掘削した。必要な記録や自然科学分析用の試料採取した後、遺構の完掘を行った。

遺構の記録は、断面図を1/20の縮尺で実測し、遺構によっては、1/10の縮尺で遺物出土状況や平面図を作成した。各遺構の断面はデジタルカメラで撮影した。遺物出土状況や個別の遺構写真、プロック写真はプローニー判(6×7)カメラを、調査区全景写真については4×5カメラをそれぞれ併用した。また、調査区全域の遺構平面図には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を利用した。

実施年度	調査事業担当								
	所長 副所長	岸本 邦敏 池野 正男	統務 主	統務課長 任 江本 瑞一	調査統括		調査課長 主 任	高田美佐子 青山 祐子	
平成25 (2013) 年度					統務課長 松尾 互	調査員 主 任		高田 光仁	朝田亜紀子
所長 副所長	岸本 邦敏 池野 正男	統務 主	統務課長 松尾 互 統務課チーフ 青山 晃	調査統括	調査課長 主 任	高田美佐子 青山 晃	調査員 主 任	高田 光仁 朝田亜紀子	
				平成26 (2014) 年度	統務課チーフ 青山 晃	調査員 主 任	高田美佐子 青山 晃	調査課長 主 任	高田 光仁 朝田亜紀子

遺跡	地区	検出面	年度	期間	延べ日数	面積	担当者	検出遺構	出土遺物
野下・ 新開遺跡	A	縄文 古代 中近世	平成25 (2013)	H25.7.1 ~8.20	36日	3,120m ²	青山 祐子 島田 光仁	溝・落とし 穴状土坑、 燒壁土坑、 土坑・倒木痕	縄文土器・ 土師器・須恵器・ 近世陶磁器・ 石製品
	B	縄文 古代 中近世	平成26 (2014)	H26.6.11 ~7.24	31日	2,100m ²	島田 光仁 朝田亜紀子	溝・落とし 穴状土坑、 燒壁土坑、 土坑・倒木痕	縄文土器・ 土師器・須恵器・ 近世陶磁器・ 石製品

第2表 調査体制・調査一覧

(2) 層序

基本層序は、I a層：黒褐色粘質土（表土・耕作土）、I a'層：にぶい黄褐色～褐色粘質土（表土・耕作土）、I d層：黒褐色粘質土（盛土）、I e層：暗褐色シルト質粘土（表土・耕作土）、II層：黒褐色粘土質シルト、II a層：黒褐色シルト質粘土、II b層：黒褐色シルト質粘土（縄文時代・古代遺構面）、III層：にぶい黄褐色粘質土～黄褐色シルト質粘土（地山）

I層は表土・耕作土・盛土からなり、a・a'・d・eに細分されている。I a層は、現在の耕作土で、全調査区で確認されている。I a'層とI d層はA地区のみで確認されている。I e層はB地区のみで確認されている。A地区的I d層は盛土でA地区的のみの分布である。

II層は遺物包含層であり、a・bに細分されている。II a層とII b層はA地区で確認されており、単にII層としたものはB地区で確認されている。いずれも黒褐色シルト質粘土を基調としており、A地区的II a層とII b層とB地区的II層は細分されているもの同じ地層とみなされる。このII層は、東側では層厚が薄いかもしくは存在せず、西側に向かって厚く分布している。東側が薄いのは区画整理などで後世の削平を受けたことが大きな要因と推定される。この為、I層直下で遺構検出が行われた部分もある。

III層は基盤層（地山）であり、上面で各時代の遺構を検出した。埋土については縄文時代の遺構と古代の遺構について違いがほとんどなく、縄文時代の埋土の方がわずかに硬質であった。遺構から出土する遺物もほとんどない状況であった。

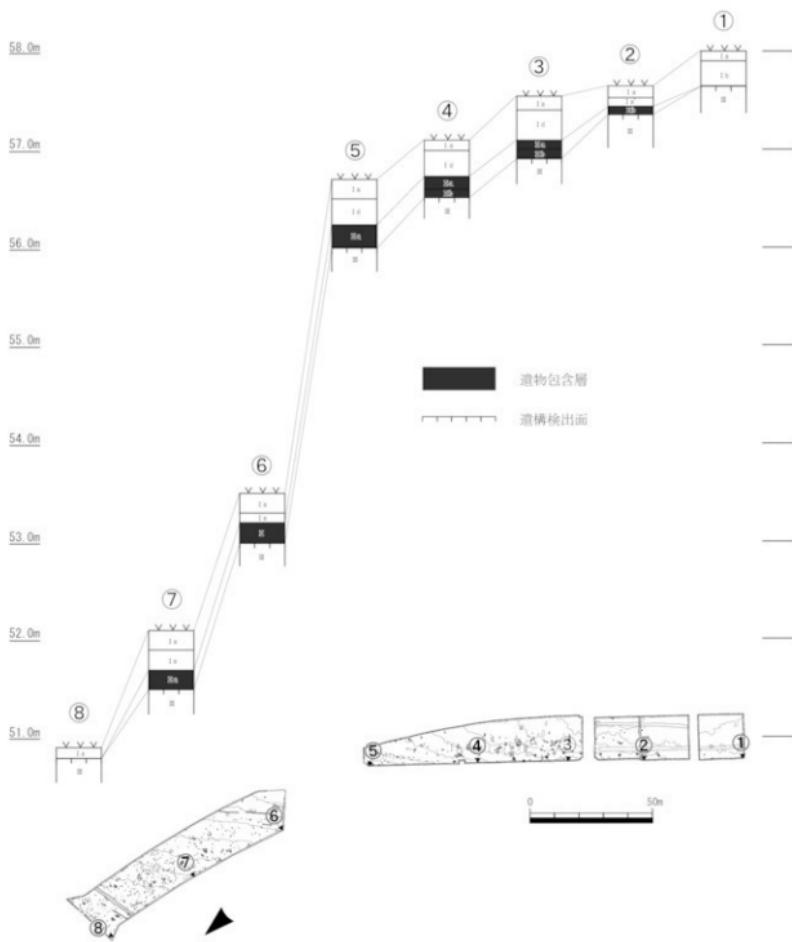
基本層	A地区	B地区
I a 表土・耕作土	7.5YR2-2黒褐色粘質土	10YR3-1黒褐色シルト質粘土
I a' 表土・耕作土	10YR5-4に赤い褐色粘質土(やや軟質)	—
I d 腐土	10YR4-4褐色粘質土(硬質)	—
I e 表土・耕作土	7.5YR2-2黒褐色粘質土(軟質)	—
II 遺物包含層	—	10YR3-3暗褐色シルト質粘土
II a 遺物包含層	5YR2-2黒褐色シルト質粘土	—
II b 遺物包含層	—	7.5YR3-2黒褐色シルト質粘土
III 基盤層(地山)	10YR4-6に赤い褐色粘質土	10YR5-6暗褐色シルト質粘土

透視検出面

第3表 基本層序



第2図 調査区区割図



第3図 基本層序模式図

3 整理作業の経過と方法

出土遺物は、埋蔵文化財調査事務所において洗浄・注記・仕分けを行った。石製品についてはメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。調査概要については、『埋蔵文化財年報』(平成25・26年度)として発刊している。

報告書作成に向けての本格的な室内整理作業は、平成27年4月に開始した。27年度は、土器の接合の見直し、石製品の実測、遺物挿図及び図版作成、遺構の図版作成、自然科学分析、原稿執筆、編集及び、印刷と校正を行った。遺物の洗浄・注記は、埋蔵文化財調査事務所で室内整理作業員が行った。遺物の実測は、調査員及び室内整理作業員が行った。遺物実測図、遺構実測図、写真は各台帳を作成して整理し、パソコンコンピューターを使用してデータ入力を行った。遺物・遺構のデータは観察表として掲載している。遺物の写真撮影は4×5カメラを用いて撮影を実施した。自然科学分析は、専門業者に委託し、結果報告を掲載した。

実施年度	総括	整理事業担当							
		所長	岸本 雅敏	総務	総務課長	松尾 互	整理統括	調査課長	鳥田美佐子
平成26 (2014) 年度					総務課チーフ 青山 覧	担当	調査課チーフ 金三津道子		
平成27 (2015) 年度	総括	所長	岸本 雅敏	総務	総務課長 総務課主査 青山 覧	松尾 互	整理統括 調査課長 調査課主査 担当	鳥田美佐子 越前 恵子 主任	鳥田 光仁

第4表 整理体制一覧

4 調査成果の公開

(1) 調査成果報告会

平成27年3月21日、「とやま発掘最前線－平成26年調査成果報告会－」において、発掘調査の状況や出土遺物について発表した。

注

注1 富山市教育委員会 2012『富山市二本榎道路確認調査報告書－主要地方道小杉榎中線道路改良事業に先立つ確認調査報告－』
富山市埋蔵文化財報告書 48

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置し、2005年の合併により、上新川郡大沢野町・大山町、婦負郡八尾町・婦中町・山田村・細入村の7市町村を合わせた。これにより、富山県の全体面積の約1/3を占めている。野下・新開遺跡はこの富山市に所在し、富山県のほぼ中央を南北に縱走する呉羽丘陵と南に達する射水丘陵の間に位置している。地形的には更新世後期に形成された境野新扇状地の扇頂部付近にあたり、中位段丘に分類されている。境野新扇状地は井田川と神通川が合流した河川により堆積作用を繰り返し、北側に向かって扇状地の地形を形成し、射水平野に至っている。標高は50m～58mを測り、周辺には畑地や果樹園が広がっている。東には眼下に富山平野が広がり、遠くは北アルプス連峰の雄大な景色を望むことができる。また、北には富山湾までつづく射水平野が開けている。

2 歴史的環境

野下・新開遺跡が立地している呉羽丘陵周辺と射水丘陵一帯は県内でも有数の遺跡密集域である。一帯は古くは旧石器時代から中近世に至る遺跡が分布しており、人間が生活していく上で恵まれた地域の一つに挙げられる。

旧石器時代の遺跡は、県内で100を越えるが、分布する地域から大きく3つの遺跡群に分類されている。それは、野下・新開遺跡周辺の射水丘陵遺跡群、立野原遺跡群、神通川右岸地域の遺跡群である。射水丘陵旧石器遺跡群の中には細谷遺跡があり、数百点の石器が確認されている県内でも一大石器分布遺跡といえる。また、石山I遺跡では横方向に長い剥片である翼状剥片を素材とする甲斐型ナイフ形石器が確認されており、瀬戸内技法の影響を受けた石器がこの地域にまで及んでいることを示している。さらに、新開遺跡においては、石刃と呼ばれる縱方向に長い剥片を用いた石刃技法のナイフ型石器が出土しており、東日本や東北地方などの北方から波及したものである。これらのことは、西方と北方の両方の文化の影響を受けていたことを示唆している。

縄文時代になると、呉羽・射水の両丘陵上には多くの遺跡が展開する。草創期では、杉谷遺跡・千坊山遺跡・新町II遺跡・平岡遺跡（2）などの散布地が確認されている。千坊山遺跡や平岡遺跡からは丁寧に加工された石槍が採集されている。早期では、北代遺跡や直坂遺跡で当該期を特徴づける押型文土器が確認されている。前期になると遺跡数が多くなる。平岡遺跡（2）では14棟の竪穴建物や5棟の掘立柱建物が環状に配置されており、中央部には土坑墓や埋設土器などの墓域が確認されている。また、土器の他に块状耳飾が多数出土しており、土器に残された圧痕からエゴマやマメ類などの食用植物の利用が明らかになった。小竹貝塚と観ヶ森貝塚は日本海側では少ない貝塚を形成しており、貝の種類は汽水性のヤマトシジミが主体である。小竹貝塚からは竪穴建物や土坑墓などが見つかっており、住居・加工場・貝塚・墓という一連の生活史がわかる貴重な調査例である。また、土器の他に、漆塗や赤彩された土器、木製容器・丸舟・漆繩などの有機質な製品の他に、石鎌・磨製石斧などの実用品、他に块状耳飾・玉類といった石製装飾品、刺突具・針・櫛・貝製品などの骨角貝製品が出土しているし、累計100体もの人骨が確認されている。中期になると開ヶ丘孤谷III遺跡（37）

や北代遺跡が丘陵上に分布する。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡では堅穴建物75棟が確認されており、拠点的集落の一つと考えられている。また、北代遺跡でも掘立柱建物4棟の他に78棟もの堅穴建物が確認されている。石錘が多量に出土していることから漁労活動も積極的に行われていた。後期～晩期では遺跡数は減少する。二本榎遺跡や各願寺前遺跡などがあり、二本榎遺跡では東海や西日本の影響を受けた土器群や、精神文化の一端が窺える後期前葉の土偶の出土が知られている。

弥生時代の前期から中期にかけて遺跡の分布が希薄となる。しかし、中期中葉から後後にかけて沖積平野を舞台に農田遺跡や千原崎遺跡などの集落遺跡が展開する。弥生時代後期から古墳時代にかけて呉羽丘陵上には王塚・千坊山遺跡群をはじめ、四隅突出型埴丘墓を特徴とする杉谷古墳群(59)、六治古塚古墳、向野塚古墳などの古墳や墳丘墓が数多く築造されている。特に、大型前方後方墳である勅使塚古墳や王塚古墳(15)は首長クラスの古墳であり、王塚・千坊山遺跡群として国史跡となっている。また、二本榎遺跡(6)は古墳時代後期の円墳が確認され、横穴式石室が構築されていた。

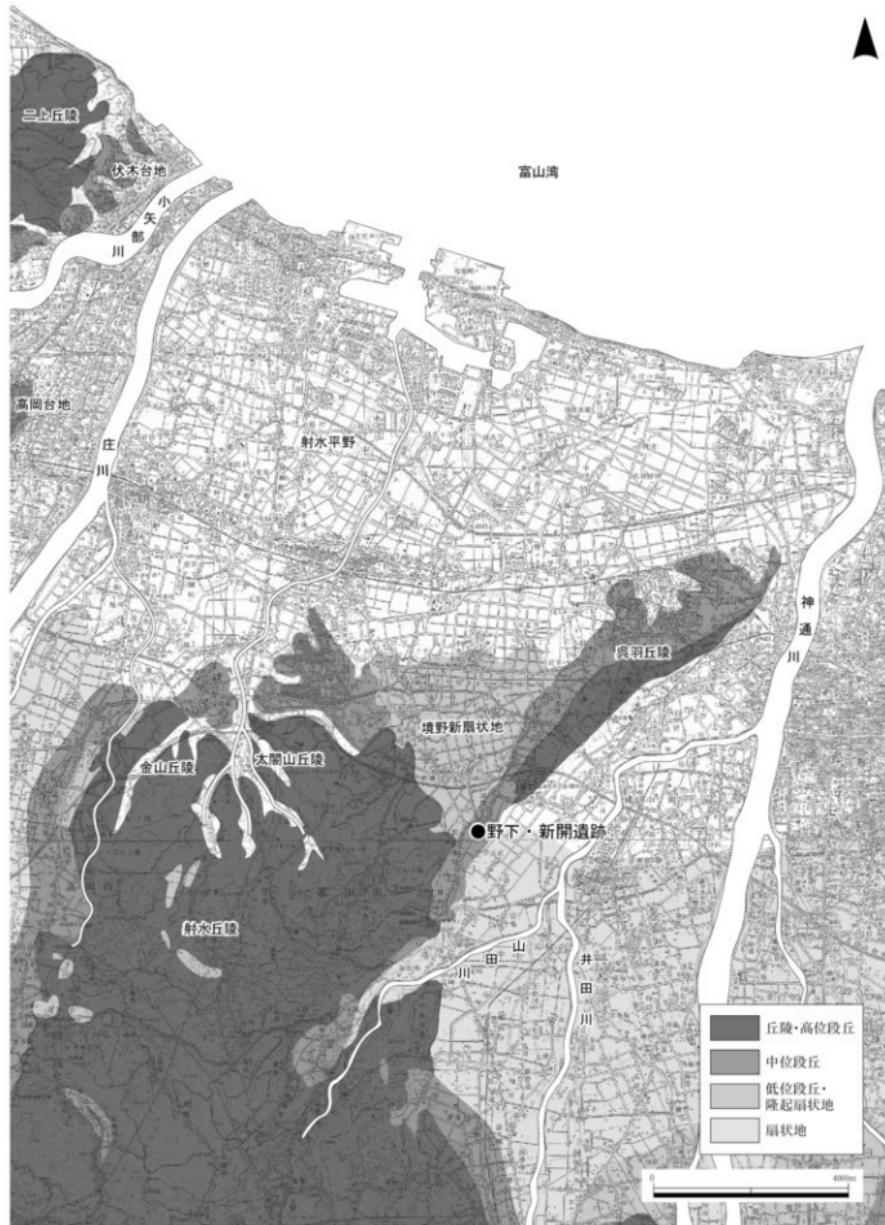
古代では、呉羽丘陵と射水丘陵において窯業、製鉄業が盛んに行われ、周辺は県内でも有数な一大生産地である。立地では丘陵の斜面や谷間に有効に利用し、周辺にある森林資源を活用している、一大コンビナートの様相を呈している。7世紀の須恵器窯には平岡窯跡、8世紀になると古沢窯跡群や北押川窯群、9世紀になると室住池窯跡群など多くの窯跡が採業されていた。柄谷南遺跡では瓦陶兼業窯2基で大量の瓦と須恵器を生産し、透彫り木製品や鐘状銅製品などの仏教関連製品も出土している。また、向野池遺跡では掘立柱建物や井戸の他に、瓦陶が出土している。

中世では、富崎城跡、鶴ヶ城跡、下瀬城跡、安田城跡などの城館や城が丘陵や平野に立地する。富崎城は別名滝山城と呼ばれ、戦国期の婦負郡内における神保氏支配の中心的拠点として重要な役割を果たしていた。鶴ヶ城は辺呂川右岸に築かれた平城であり、下瀬城は富崎城から13kmほど離てた尾根上に立地している。これら両城は富崎城の出城的な役割が考えられている。安田城は井田川の左岸に築かれた平城で、国史跡に指定されている。これらの城は、婦負郡内の南北ルートとして呉羽丘陵の東麓をとおり八尾方面へ向かう街道の要衝に築かれている。

近世では、天正13(1585)年に前田家により支配される越中国は、明治初頭の廃藩置県まで約260年間にわたり継続的に続く。この間、農業は神通川から取水された牛ヶ首用水による開墾や新田開発により、生産量が上がるなど、各方面の近代的発展の足がかりとして進められていった。

参考文献

- 武田健次郎 2000「砺波・射水平野における遺跡群の展開」『富山考古学研究』第3号
 財團法人富山県文化振興財團埋文化財調査事務所
 富山市教育委員会 1999『柄谷南遺跡』
 富山市教育委員会 2000『境野新遺跡・向野池遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2002『富山市開ヶ丘中山I遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘中遺跡 開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2002『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中山III遺跡 開ヶ丘狐谷III遺跡 開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡・開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘狐谷IV遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷III遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2004『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡 開ヶ丘狐谷II遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2004『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2012『富山市二本榎遺跡確認調査報告書』
 富山市 1987『富山市史』通史〈上巻〉
 妇中町 1996『婦中町史』通史編



第4図 地形図（1：100,000）



第5図 周辺遺跡位置図(1:25,000)

第5表 周辺遺跡一覧

第Ⅲ章 縄文時代

1 概 要

野下・新開遺跡周辺の縄文時代の遺跡には平岡遺跡（前期・晚期），平岡塙跡群・二本榎Ⅲ遺跡，池多東遺跡，北押川C遺跡（前期・中期），境野新遺跡（中期），開ヶ丘中山Ⅲ遺跡（中期），開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡（草創期・早期・中期）などがあり，そのほとんどが呉羽丘陵と射水丘陵の緩斜面もしくは境野新扇状地の段丘上に位置している。時期的に前期から中期の遺跡が多く知られている。一帯は黒色土壤が広く分布し，古くからその土壤を用いた畑作や果樹園などの土地利用が発達してきた。

野下・新開遺跡は北西側に向かって緩やかに傾斜しており，標高はA地区で56.7～58.0m，B地区で50.9～53.5mである。縄文時代の遺構はA地区とB地区のいずれからも確認されており，報告するのは落とし穴状土坑15基，土坑1基，倒木痕5基である。落とし穴状土坑は規則性をもって構築されており，A～Cの3系列に大別される。これらの落とし穴状土坑からは出土遺物が無く，時期決定が難しい。遺物には縄文土器，石製品が確認されており，概ね縄文時代中期～晚期の所産である。

2 遺 構

（1）土 坑

土坑には落とし穴状土坑とその他の土坑とに大別される。

落とし穴状土坑としたものの特徴は，直径に対して深さがあり，また，壁面が直線的で垂直もしくは，底部付近がややオーバーハング状を呈する。A・Bのいずれの地区からも確認されており，A～Cの3系列が確認されている。A系列・B系列はA地区，C系列はB地区である。A系列はSK190・SK191・SK192・SK193の4基で構成されている。B系列はSK162・SK166・SK169・SK179・SK183・SK185・SK186・SK189の8基で構成されている。SK169のみ離れているが，ここでは一連のものとして取り扱う。C系列はSK714・SK808・SK832の3基で構成されており，直線的に並ばない。A系列・B系列は北北東の方向に延びるように配置されており，C系列は北北東から北に延びている。延長はA系列で20.5m，B系列で78.0m，C系列で23.5mであり，遺構確認面の標高はA系列で56.7～57.0m，B系列で56.8～57.6m，C系列で51.3～50.7mである。これらは概ね等高線に対して，どちらかというと平行に並ぶように構築されているように見受けられる。

その他の土坑にはSK167があり，縄文時代晚期の土器がやまとまって出土している。

A 落とし穴状土坑

162号土坑（SK162, 第11図, 図版5）

A地区中央区の北西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は円形で，底面は平坦である。長径1.08m，短径0.98m，検出面から底辺までの深さは1.52mを測り，B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし，風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

166号土坑（SK166, 第11図）

A地区中央区の北西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は梢円形で，底面は

平坦である。長径0.98m、短径0.78m、検出面から底辺までの深さは1.18mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

169号土坑（SK169、第11図）

A地区南側区の北西に位置する落とし穴状土坑で、調査区外に広がる。開口部と底辺の平面形は円形で、底面は平坦である。長径0.76m、検出面から底辺までの確認できる深さは1.14mを測り、他の土坑列と比べてやや離れた場所に構築されている。B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

179号土坑（SK179、第11図、図版5）

A地区北側区の南西に位置する落とし穴状土坑で、調査区外に広がる。開口部と底辺の平面形は円形と推定され、底面はやや丸みを帯びる。長径0.78m、短径0.72m、検出面から底辺までの深さは0.94mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

183号土坑（SK183、第11図、図版5）

A地区北側区の南西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は円形で、底面はやや凸凹がある。長径1.00m、短径0.88m、検出面から底辺までの深さは1.09mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

185号土坑（SK185、第11図）

A地区北側区の南西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は円形で、底面は平坦である。長径1.04m、短径0.98m、検出面から底辺までの深さは1.20mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

186号土坑（SK186、第11図、図版6）

A地区北側区の南西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は梢円形で、底面は平坦である。長径1.00m、短径0.86m、検出面から底辺までの深さは1.42mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

189号土坑（SK189、第11図）

A地区北側区の南西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は円形で、底面は平坦である。長径1.04m、検出面から底辺までの深さは0.87mを測り、B系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

190号土坑（SK190、第12図、図版6）

A地区北側区の北東に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は梢円形で、底面は平坦である。長径0.64m、短径0.52m、検出面から底辺までの深さは0.88mを測り、A系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

191号土坑（SK191、第12図、図版6）

A地区北側区の北東に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は楕円形で、底面は平坦である。長径0.76m、短径0.56m、検出面から底辺までの深さは1.23mを測り、A系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物は後世の混入とみられる磁器がある。

192号土坑（SK192、第12図）

A地区北側区の北東に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形はいびつな楕円形で、底面は平坦である。長径0.78m、短径0.44m、検出面から底辺までの深さは1.21mを測り、A系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

193号土坑（SK193、第12図、図版6）

A地区北側区の北東に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は楕円形で、底面は平坦である。長径0.78m、短径0.60m、検出面から底辺までの深さは1.26mを測り、A系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

714号土坑（SK714、第12図、図版10）

B地区の北西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は楕円形で、底面は平坦である。長径1.02m、短径0.92m、検出面から底辺までの深さは0.90mを測り、C系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

808号土坑（SK808、第12図、図版10）

B地区の北西に位置する落とし穴状土坑である。開口部と底辺の平面形は円～楕円形で、底面は平坦である。長径0.91m、短径0.78m、検出面から底辺までの深さは1.07mを測り、C系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物はない。

832号土坑（SK832、第12図、図版10）

B地区の北西に位置する落とし穴状土坑で、SD532に切られる。開口部と底辺の平面形は楕円形で、底面は平坦である。長径1.20m、短径0.88m、検出面から底辺までの深さは1.37mを測り、C系列を構成している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物を含んでいる。出土遺物はない。

B その他の土坑

167号土坑（SK167、第12図、図版6）

A地区南区の北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で、底面はやや平坦である。長径1.29m、短径1.14m、深さは0.54mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、風化したとみられる炭化物状のものが少量含まれている。出土遺物は繩文土器（晩期）がある。放射性炭素年代測定（AMS法）では土器外面付着炭化物2点で 2540 ± 20 yrBPと 2500 ± 30 yrBPであった。繩文時代晩期中葉～後葉にあたり、土器形式とも概ね良好なデータが得られた。しかし、埋土中の木炭1点では、 3560 ± 30 yrBPで繩文時代後期前葉の数値であるため、土器よりも木炭の方が古いことが分かった。これは、遺構内に後期前葉の木炭が混入したと解釈するのが妥当であろう。以上のことより、この土坑は繩文晩期後葉に帰属すると考えられる。

(2) 倒木痕

倒木痕としたものには規模が大小様々であるが、A地区3基、B地区2基の合計5基が確認されている。

倒木痕については人為的な構築物ではないので、本来積極的に取り上げるべきものではないのかもしれない。しかし、倒木痕は暴風といった何らかの自然現象の影響力を強く受けて立木が倒れた痕跡とみなされる場合が多い。それは、当時の人々の生活にも少なからず影響を及ぼし、例えば、人間活動や集落の消長、自然災害史などを考える上で一要素となり得る。そのため、本書では紙面を割いて記載することとする。なお、倒木した時期については、出土遺物が伴わないと明確ではないが、埋土を一つの根拠として、ここでは縄文時代として報告しておく。

71号倒木痕 (SX71, 第13図, 図版6)

A地区北側区の中央に位置し、平面は三日月形である。断面は三日月形の中心側は垂直に近い角度で立ち上がり、反対側は緩やかに立ち上がる逆三角形を呈す。長径3.18m、短径1.06m、深さ0.62mで、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物はない。

87号倒木痕 (SX87, 第13図)

A地区北側区の中央に位置し、平面は三日月形もしくは帯状である。断面は中心側に対して垂直に近い角度で立ち上がり、反対側は緩やかに立ち上がる逆三角形を呈す。長径2.12m、短径0.72m、深さ0.36mで、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物はない。

113号倒木痕 (SX113, 第13図)

A地区北側区の南に位置し、平面形は環状を呈する。断面は中心側が垂直に近い角度で立ち上がり、反対側は緩やかに立ち上がる逆三角形を呈す。長径1.56m、短径0.96m、深さ0.14mで、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物はない。

455号倒木痕 (SX455, 第13図)

B地区のほぼ中央に位置し、平面形は不整形を呈する。断面は中心側が部分的にやや垂直気味に立ち上がり、反対側は緩やかに立ち上がる逆三角形を呈す。長径2.14m、短径0.76m、深さ0.10mで、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物はない。

724号倒木痕 (SX724, 第13図, 図版10)

B地区の北に位置し、平面形は三日月形を呈する。断面は中心側が垂直もしくはオーバーハング状に立ち上がり、反対側は緩やかに立ち上がる逆三角形を呈す。長径2.54m、短径1.42m、深さ0.66mで、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物はない。

3 遺物

(1) 縄文土器 (第14図, 図版13)

縄文土器は、深鉢、浅鉢、鉢、筒形土器が出土している。いずれも破片であり、全体の器形が分かれるような個体は認められない。

1～13はSK167からの出土である。1～3は粗製の深鉢で、1・2は口縁部の小破片で、表面は横方向の条痕文が認められる。3は口縁部の破片で、表面には横方向と右上方向の条痕文がみられる。いずれも、胎土中に小粒の角閃石を含む。4～9は小型の精製鉢である。4は口縁部の破片で、横方向の隆帯が認められる。表面には赤彩が施される。5は口縁部の破片で、やや外傾する。口唇部はやや面取る。浅鉢か。表面には赤彩が施される。6は浅鉢とみられる口縁部の破片で、表面には赤彩が

施される。7は浅鉢とみられる胴部で、表面には上位に横方向、下位に縦方向の沈線文が施される。8は胴部の破片で、横方向の沈線文が施される。9は浅鉢とみられる胴部の破片で、沈線文が施される。10は筒形土器の底部で、外面には沈線が巡る。表面には赤彩が施される。底径4.8cmを測る。11は底部の破片で、大きく開いて立ち上がる。底面には編目がみられる。12は底部破片で、外面には横方向の条痕文が認められる。底面には編目がみられる。13は底部破片で、底面には編目がみられる。

14~17は包含層出土の土器である。14は粗製の深鉢で、口縁部が大きく外反する。口唇部は列点刺突文が施され、外面は横方向の条痕文である。15は浅鉢とみられる口縁部の破片で、縦方向の沈線文が施される。16は口縁部の小破片で、貼付けた隆帯に刻目列点文を施す。17は底部の破片で、底面に編目がみられる。

1~14は概ね繩文時代晩期の長竹式に、15~16は中期の串田新式に相当すると考えられる。

(2) 石製品（第14図、図版14）

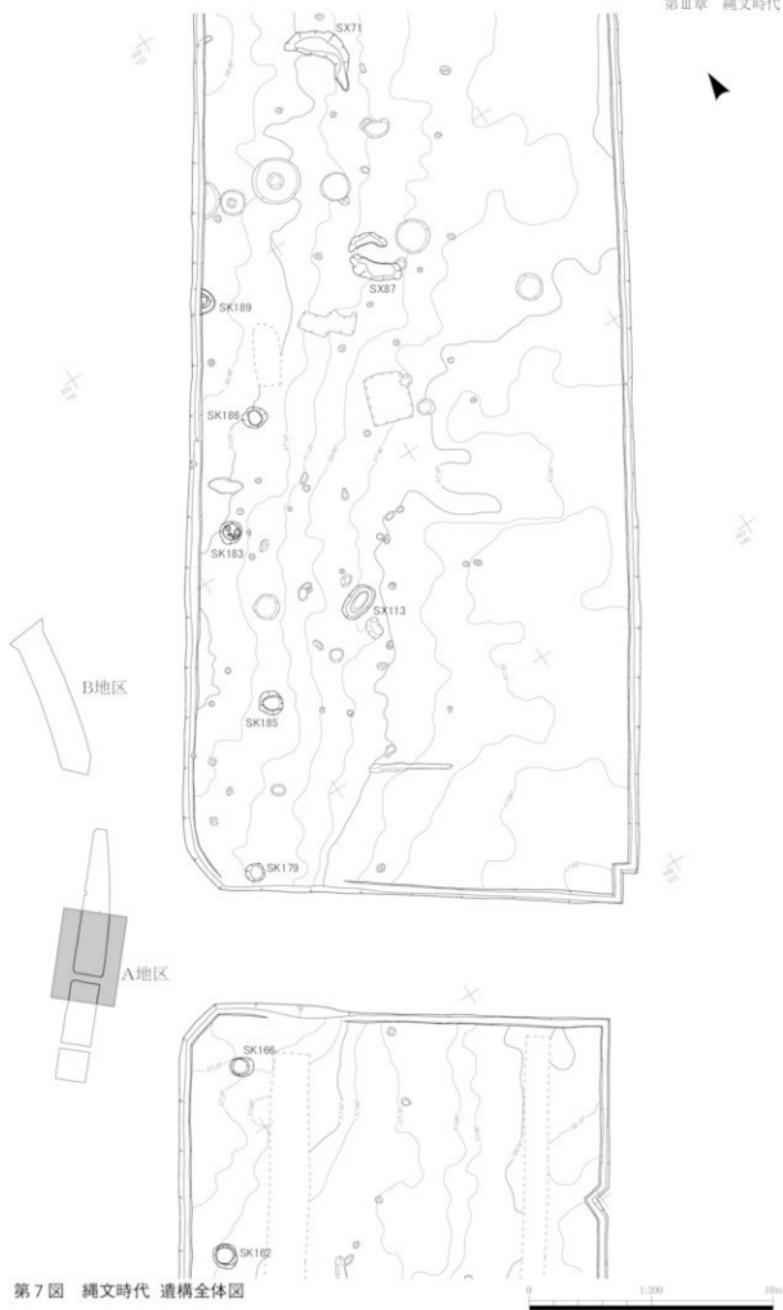
石製品には打製石斧、磨製石斧、敲石、礫器がある。図示したのは4点である。

18の打製石斧は、自然の礫を利用して作られたもので、片面に自然面が認められる。側縁を加撃によりわずかなくびれを有し、刃部が広がらない短冊形を呈するタイプである。石材はヒン岩である。19は磨製石斧で、およそ半分程度残っている。刃部がやや幅広の個体である。石材は透閃石岩である。20は敲石で、自然の亜円礫を使用している。先端に敲打痕が認められる。石材は片麻岩である。21は礫器の破片で、両側を粗く加撃を加えている。石材は片麻岩である。

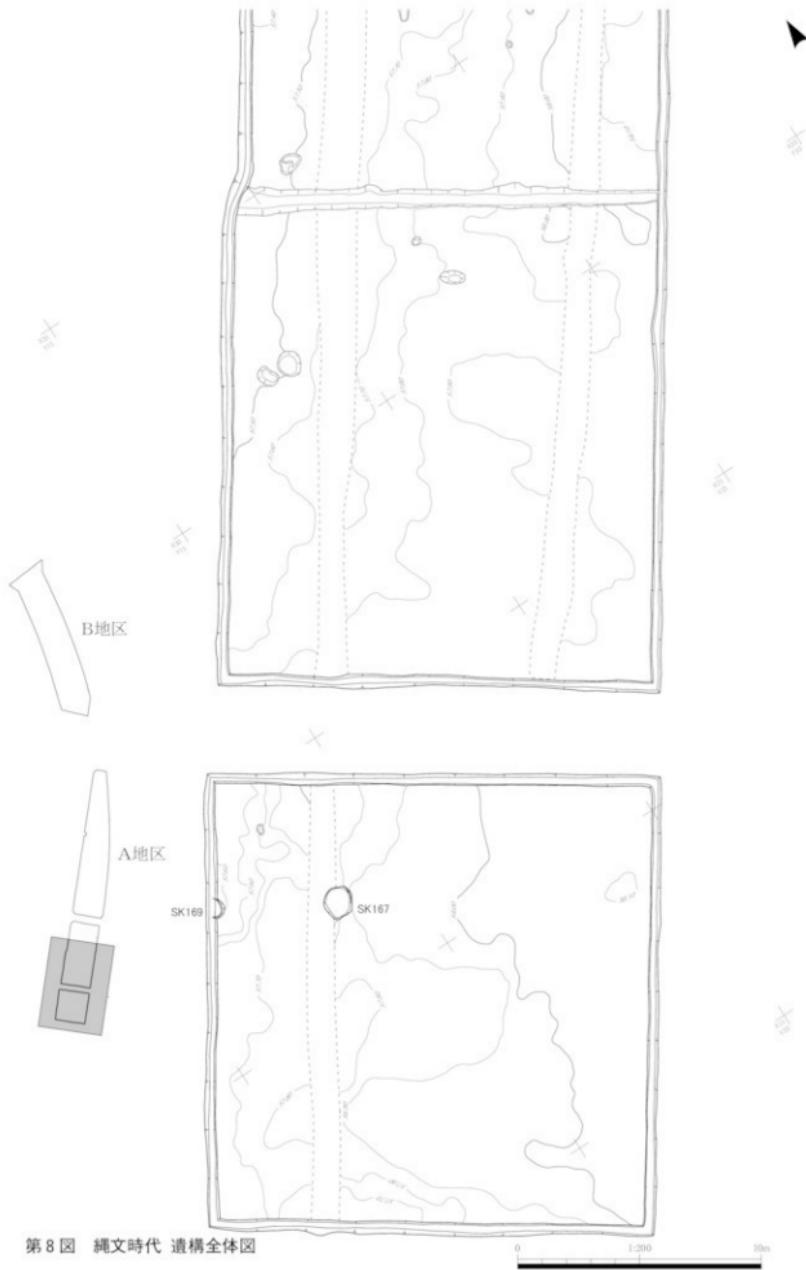
参考文献

- 上野 章 1994『小杉町針原遺跡発掘調査報告』富山県小杉町教育委員会
- 岡本恭一 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告A・C区下層編』財團法人石川県埋蔵文化財センター
- 狩野 路 1988『串田新・大杉谷式土器様式』『繩文土器大観 第3巻 中期Ⅱ』小学館
- 神保孝造 1973『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
- 町田賢一 2006『条痕文時代』『下老子篠川遺跡発掘調査報告』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 南 久和 1989『北陸晩期土器様式』『繩文大観 4』小学館

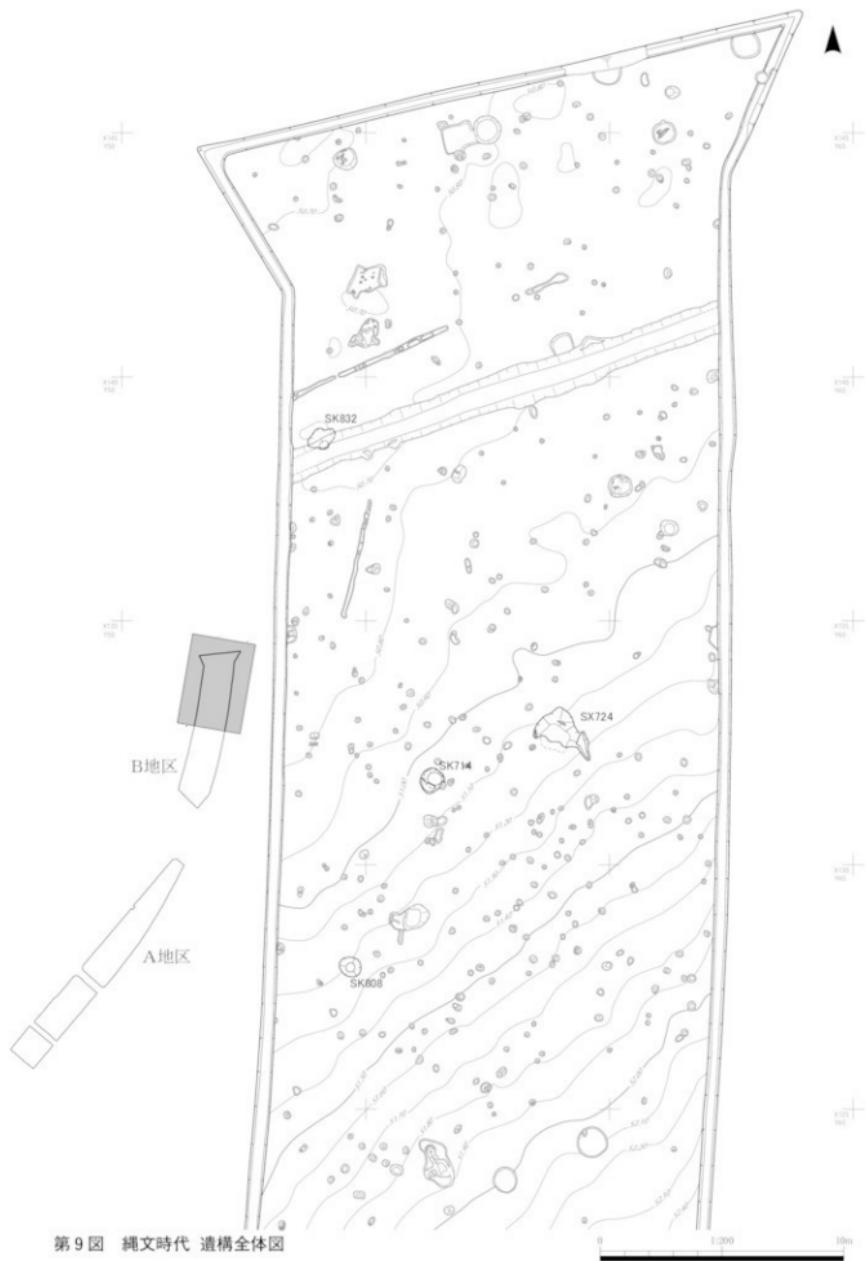




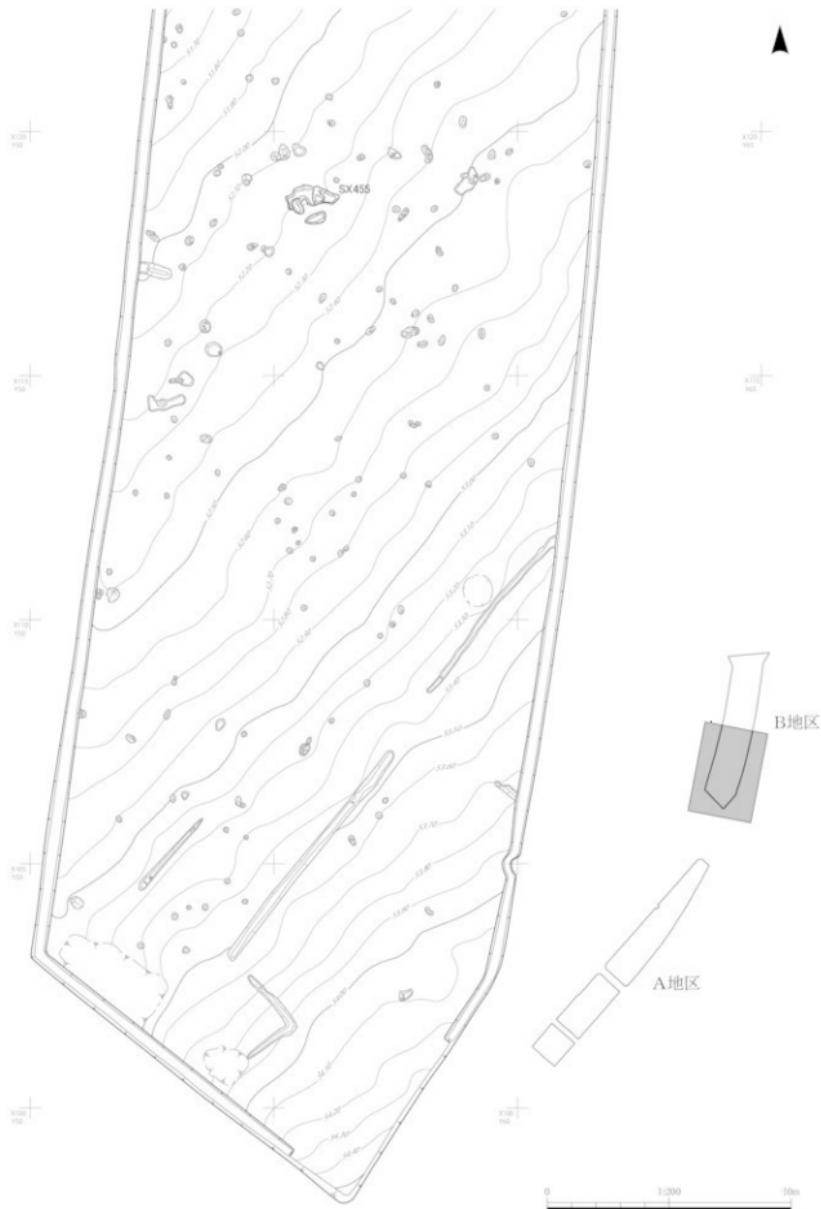
第7図 繩文時代 遺構全体図



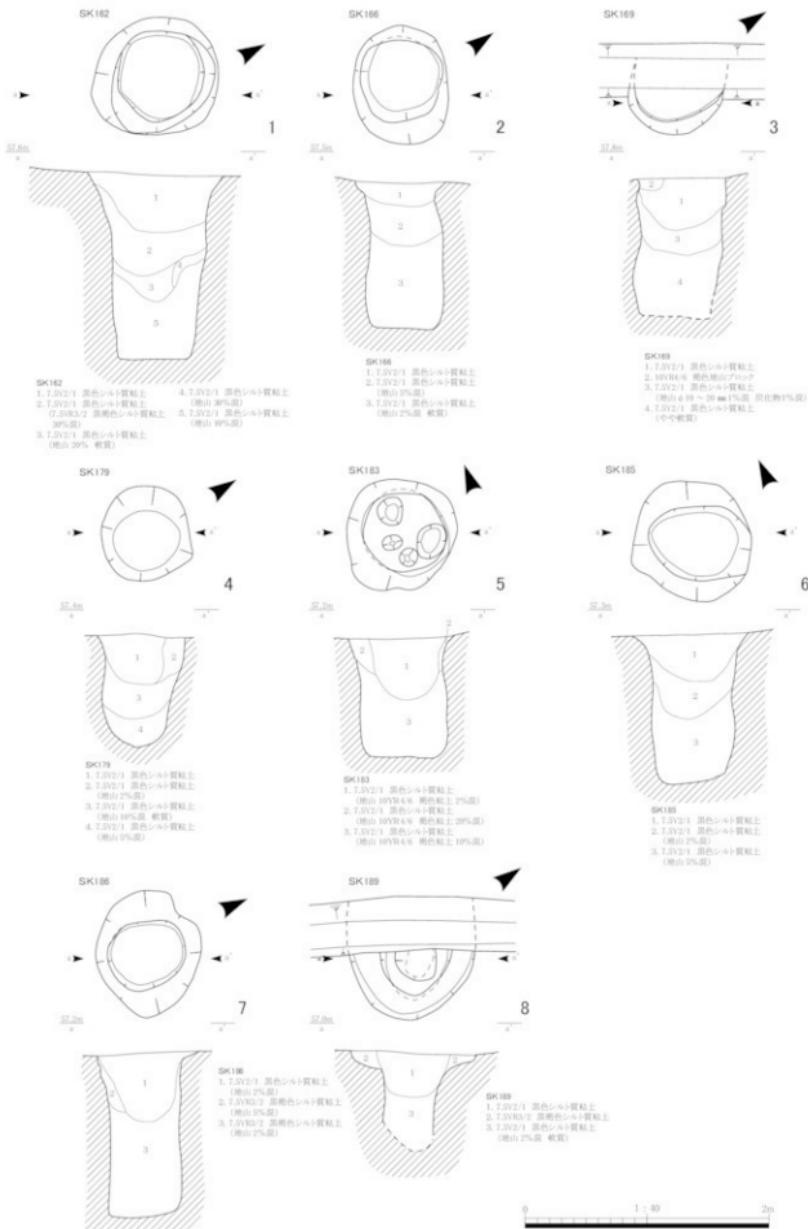
第8図 縄文時代 遺構全体図



第9図 繩文時代 遺構全体図

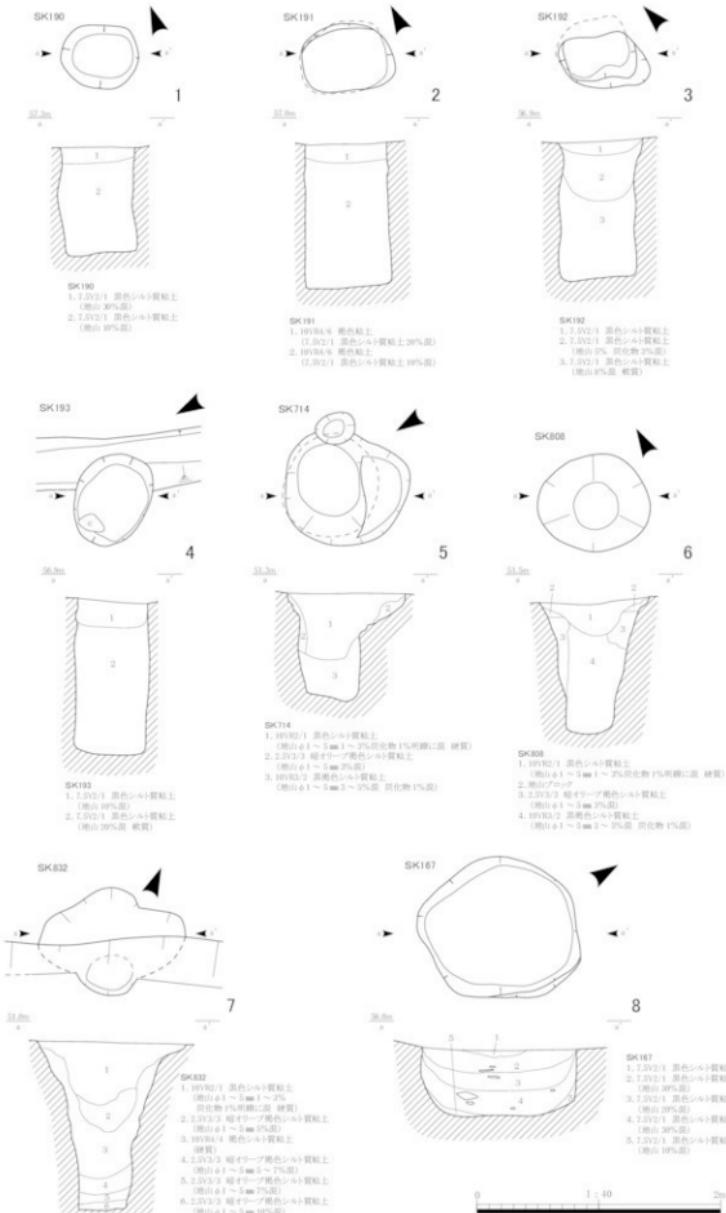


第10図 繩文時代 遺構全体図



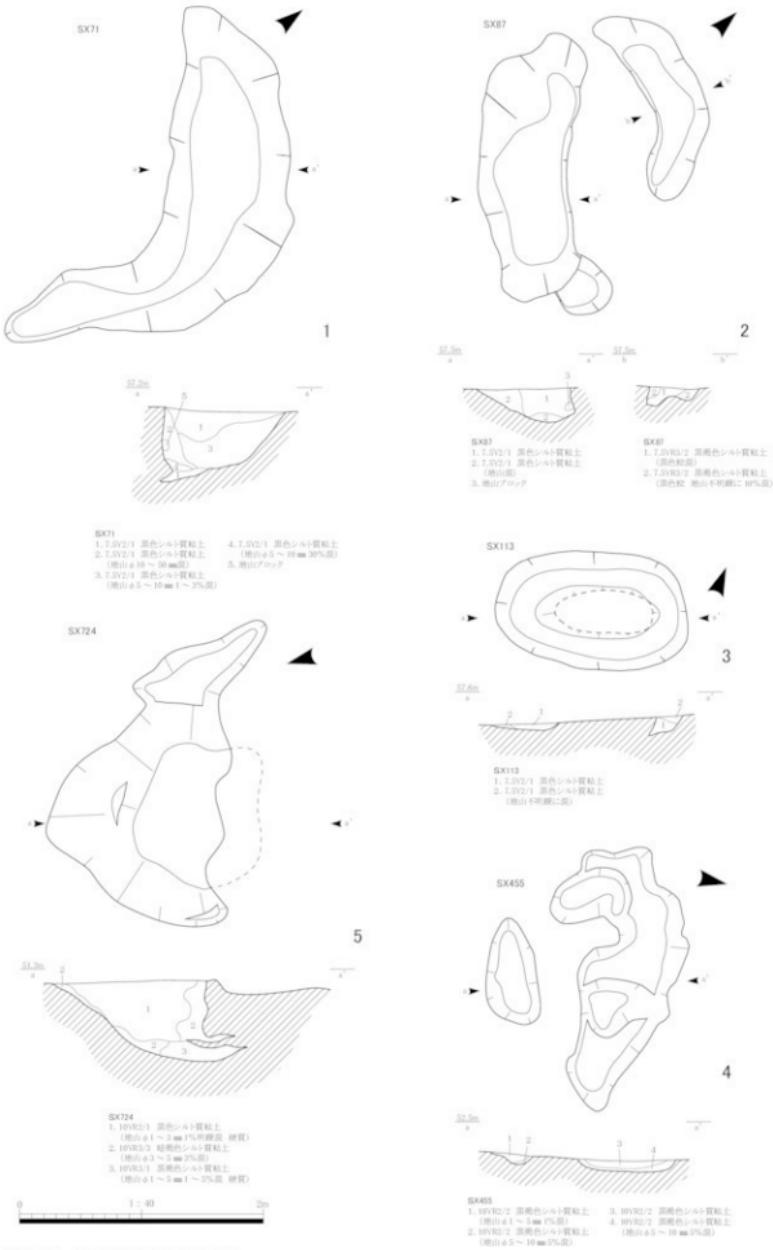
第11図 繩文時代 遺構実測図

1. SK162 2. SK166 3. SK169 4. SK179 5. SK183 6. SK185 7. SK186 8. SK189



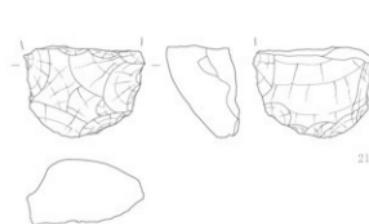
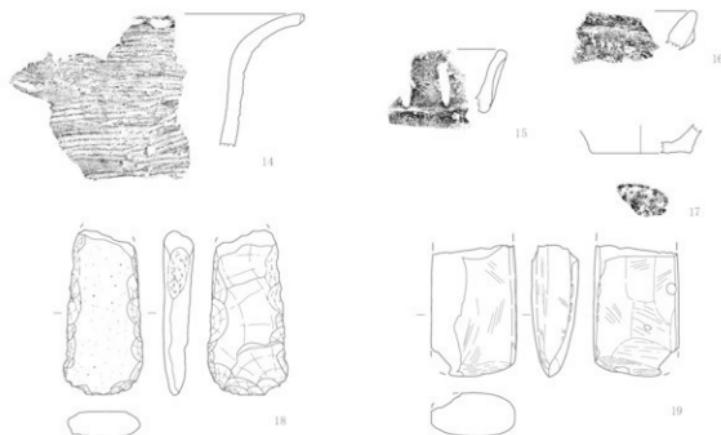
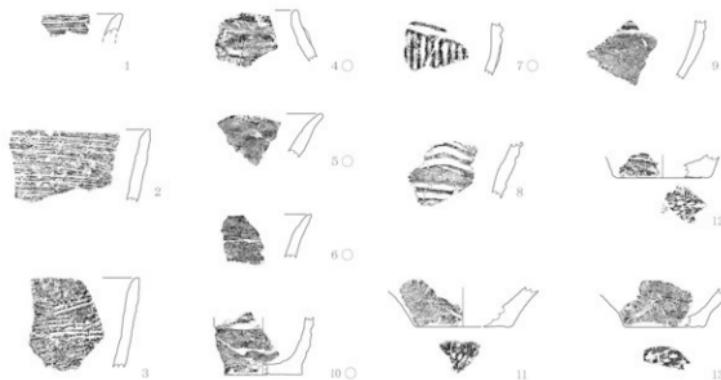
第12図 繩文時代 遺構実測図

1. SK190 2. SK191 3. SK192 4. SK193 5. SK714 6. SK808 7. SK832 8. SK167



第13図 繩文時代 遺構実測図

1. SX71 2. SX87 3. SX113 4. SX455 5. SX724



第14図 繩文時代 遺物実測図 (1~21 1/3)
SK167 (1~13)

第6表 繩文時代 土坑一覧

遺構番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	備考		切り合い	排団番号	国版番号	
				長径	短径	深さ								
SK162	A	SK162	円	1.08	0.98	1.52		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11	5		
SK166	A	SK166	椭円		0.98	0.78	1.18		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11		
SK167	A	SK167	椭円	1.29	1.14	0.54	縄文土器	縄文時代	縄文時代後期多數出土。AMTS上層：縄文晚期中～後期、灰化土：縄文後期前葉の年数が得られている。		12	6		
SK169	A	SK169	円	0.76	(0.60)	(1.14)		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11			
SK179	A	SK179	円	0.78	0.72	0.94		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11	5		
SK183	A	SK183	円	1.00	0.88	1.09		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11	5		
SK185	A	SK185	円	1.04	0.98	1.20		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11			
SK186	A	SK186	椭円	1.00	0.86	1.42		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11	6		
SK189	A	SK189	円	1.04	(1.00)	(0.87)		縄文時代	落とし穴状土坑。B系列		11			
SK190	A	SK190	椭円	0.64	0.52	0.88		縄文時代	落とし穴状土坑。A系列		12	6		
SK191	A	SK191	椭円	0.76	0.56	1.23	磁器	縄文時代	落とし穴状土坑。A系列。磁器は盗入とみられる。		12	6		
SK192	A	SK192	椭円	0.78	0.44	1.21		縄文時代	落とし穴状土坑。A系列		12			
SK193	A	SK193	椭円	0.78	0.60	1.26		縄文時代	落とし穴状土坑。A系列		12	6		
SK714	B	SK414	椭円	1.02	0.92	0.90		縄文時代	落とし穴状土坑。C系列		12	10		
SK808	B	SK508	円～椭円	0.91	0.78	1.07		縄文時代	落とし穴状土坑。C系列		12	10		
SK832	B	SK532	椭円	1.20	0.88	1.37		縄文時代	落とし穴状土坑。C系列 <SD833		12	10		

第7表 縄文時代 倒木痕一覧

遺構番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	備考		切り合い	排団番号	国版番号
				長径	短径	深さ							
SX71	A	SX71	三日月	3.18	1.06	0.62		縄文時代	倒木痕		13	6	
SX87	A	SX87	() 状	2.12	0.72	0.36		縄文時代	倒木痕		13		
SX113	A	SX113	環状	1.56	0.96	0.14		縄文時代	倒木痕		13		
SX455	B	SX155	() 状	2.14	0.76	0.10		縄文時代	倒木痕		13		
SX724	B	SX424	三日月	2.54	1.42	0.66		縄文時代	倒木痕		13	10	

第8表 縄文時代 土器一覧

排団	遺物番号	箇所	遺構	出土地点	種類	器種	法量 (cm)	時期	詳細時期	胎土色調	胎土色	備考			
												高さ	底径		
1	13	A	SK167		縄文土器	深鉢	1.19	0.6	後期	長竹式	5YR6-6	橙色	石英		
2	13	A	SK167		縄文土器	深鉢	(4.4)	0.7	後期	長竹式?	5YR6-6	橙色	石英、長石、角閃石(少)		
3	13	A	SK167		縄文土器	深鉢	(5.5)	0.7	後期	長竹式?	10YR6-4	にふい黄褐色	石英、長石、角閃石(少)		
4	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(2.8)	0.6	後期	長竹式	10YR5-3	にふい黄褐色	赤彩あり。頭部に陰帶。石英、長石		
5	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(2.7)	0.7	後期	長竹式	7.5YR6-6	橙色	赤彩あり。石英		
6	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(2.7)	0.6	後期	長竹式	7.5YR6-4	にふい黄褐色	赤彩あり。石英		
7	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(3.2)	0.6	後期	長竹式	10YR7-4	にふい黄褐色	赤彩あり。石英、長石		
8	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(3.5)	0.7	後期	長竹式	7.5YR5-4	にふい黄褐色	石英、雲母、角閃石(少)		
9	13	A	SK167		縄文土器	浅鉢	(3.6)	0.6	後期	長竹式	10YR7-4	にふい黄褐色	赤彩あり。		
10	13	A	SK167		縄文土器	筒形	(3.5)	4.8	0.6	後期	長竹式	10YR7-4	にふい黄褐色	赤彩あり。石英、長石	
11	13	A	SK167		縄文土器	鉢	(2.2)	6.0	0.8	後期	長竹式	10YR6-4	にふい黄褐色	石英	
12	13	A	SK167		縄文土器	筒形	(1.3)	5.8	1.0	後期	長竹式	10YR6-4	にふい黄褐色	石英、長石	
13	13	A	SK167		縄文土器	鉢	(2.0)	5.0	0.6	後期	長竹式	7.5YR6-4	にふい黄褐色	石英、長石	
14	13	B	X135Y55 II	縄文土器	深鉢	(8.1)	0.9	後期	中期?	10YR7-3	にふい黄褐色	石英、長石、雲母、角閃石(少)			
15	13	B	X133Y57 II	縄文土器	浅鉢	(3.9)	0.6	後期	気泡式	10YR5-2	灰黃褐色	石英、長石、雲母(少)、角閃石(少)			
16	13	B	X143Y61 II	縄文土器	鉢	(2.4)	1.0	中期	串附新式	7.5YR6-6	橙色	石英、長石、雲母(少)、角閃石(少)			
17	13	B	X133Y56 II	縄文土器	鉢	(1.4)	6.0	0.7		10YR6-6	橙色	石英、長石、雲母(少)			

第9表 縄文時代 石製品一覧

排団	遺物番号	箇所	地区	遺構	出土地点	旧遺構番号	台板番号	種類	石材	法量 (cm · g)			備考
										長さ	幅	厚さ	
18	14	A	SD161	X34Y23	SD161	H130051	打製石斧	ゼン岩	(10.0)	4.7	1.8	114.21	
19	14	B	X141Y61 II			I140001	磨製石斧	透光石岩	(7.7)	5.1	2.7	177.06	
20	14	A	SD161	X37Y24	SD161	H130052	敲石	片麻岩	12.3	4.2	3.5	329.60	
21	14	B	SK372		SK72	H140002	鍛冶器	片麻岩	(6.2)	7.4	3.8	191.30	

第IV章 古代以降

1 概 要

古代の野下・新開遺跡周辺は県内屈指の遺跡密集地域であり、特に製陶・製鉄・製炭に関連する生産遺跡が多く分布している。南に隣接する平岡遺跡では8世紀～9世紀代の集落跡が確認されており、平岡窯跡群では7世紀代の須恵器が採集されている。北側には池多東遺跡があり、炭窯、焼壁土坑、粘土採掘坑が確認されている。さらに、向野池遺跡では大型掘立柱建物、炉跡、土師器焼成遺構、焼壁土坑などが確認されており、鉄生産や土器生産に関わる工房関連の集落と推定されている。開ヶ丘中遺跡では掘立柱建物や竪穴建物で構成される集落跡が確認されている。

古代以降の遺構は、A地区・B地区共に分布し、遺構としては焼成土坑、土坑、溝などが確認されている。A地区では遺構が西側に広がり、B地区では北側を中心に分布している。出土遺物は土師器、須恵器などが出土しているものの、遺構に伴わないものである。古代の可能性が高い遺構としては、放射性炭素年代測定から焼壁土坑があげられる。他の遺構については時期決定が不確定であり、埋土の状況から多くが中近世まで下ると考えられる。

2 遺 構

(1) 溝

古代以降の溝は、12条以上が検出されている。耕作に伴うとみられる小溝から、区画に用いられたとみられる規模の大きい溝などが確認されている。溝については、出土遺物が無く、時期決定できる要素がないため不明な点が多いが、埋土や切り合いなどから、古代のものはほとんど無く中近世以降のものが大半を占めると考えられる。

161号溝 (SD161, 第20図, 図版7)

A地区南側区の中央に位置し、調査区に対して東西方向に横断する溝で、両端は調査区外へ延びる。現存長17.16m、幅0.46～1.16m、深さ0.22～0.30mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物を含んでいる。現在の田畠の区画とほぼ同じような地割りであることから近世以降の溝と考えられる。出土遺物は打製石斧、敲石がある。

353号溝 (SD353, 第20図)

B地区の北側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝である。全長1.86m、幅0.42～2.40m、深さ0.02～0.06mを測る。小規模な溝であり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。SD354とはほぼ延長上にあることから同一遺構の可能性がある。また、SD833とは平行に走っている。農耕に伴う溝の可能性がある。

354号溝 (SD354, 第20図)

B地区の北側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝で、西端は調査区外へ広がる。現存長4.92m、幅0.16～0.30m、深さ0.02～0.04mを測る。小規模な溝であり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、やや硬化している。出土遺物は土師器、鉄滓がある。SD353とはほぼ延長上にあることから同一遺構の可能性がある。また、SD833とは平行に走っている。農耕に伴う溝の可能性がある。

541号溝 (SD541, 第20図)

B地区の南側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝である。全長2.88m、幅0.18~0.38m、深さ0.06~0.10mを測る。小規模な溝であり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。SD547とはほぼ平行に走っており、等高線に対しても平行に走っている。農耕に伴う溝の可能性がある。

544号溝 (SD544, 第20図)

B地区の南側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝で、東端は調査区外へ広がる。現存長8.14m、幅0.26~0.32m、深さ0.04~0.10mを測る。小規模な溝であり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。SD547とはほぼ延長上にあることから同一造構の可能性がある。等高線に対して平行に走っており、農耕に伴う溝の可能性がある。

547号溝 (SD547, 第20図)

B地区の南側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝で、東端は調査区外へ広がる。全長10.78m、幅0.38~0.46m、深さ0.07~0.11mを測る。小規模な溝で、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。SD547とはほぼ延長上にあることから同一造構の可能性が高い。等高線に対して平行に走っており、農耕に伴う溝の可能性がある。

550号溝 (SD550, 第20図、図版11)

B地区の南側に位置し、L字状に延びる溝で、南西端は攪乱で途絶えている。全長4.92m、幅2.20~3.60m、深さ0.05~0.20mを測る。小規模な溝であり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。SD547などと共に農耕に伴う溝の可能性がある。

833号溝 (SD833, 第20図、図版11)

B地区的北側に位置し、北東方向へ直線的に延びる溝で、西端と東端は調査区外へ広がる。断面は逆台形を呈し、底辺は平坦である。現存長18.40m、幅12.2~17.6m、深さ0.80~0.90mを測る。確認された溝の中では最も規模の大きなものであり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、軟質である。出土遺物はない。底辺部分の埋土を観察するとやや被熱したような硬化した部分が認められた。近現代の田畠を区画した溝の可能性がある。

(2) 土 坑

土坑は野下・新開遺跡で最も多く確認された造構である。土坑には大小様々な規模のものがあり、A地区とB地区を合わせると、650基以上が確認されている。この中には柱穴も含まれているとみられるが、明確な建物造構は確認されていない。このうち、壁面が被熱して赤色化した焼壁土坑も含まれる。

A 焼壁土坑

85号土坑 (SK85, 第20図、図版7)

A地区北側区の中央に位置する円形の焼壁土坑で、直径1.39m、短径1.39m、深さ0.20mを測る。壁面は被熱し、部分的に赤色化している。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が発達していない。SK130と比較して、全体に被熱度が小さく、赤色化が広く認められない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。出土遺物はない。

130号土坑 (SK130, 第20図、図版7)

A地区北側区の中央に位置する円形の焼壁土坑で、長径1.39m、短径1.36m、深さ0.29mを測る。壁面は著しく被熱し、赤色化している。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が発達してい

ない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。放射性炭素年代測定（AMS測定）によると、7世紀後半～9世紀中頃（1240±20yrBP, 693～855calAD）の年代が得られている。

340号土坑（SK340, 第21図, 図版11）

B地区の北側に位置する円形の焼壁土坑で、長径1.18m、短径1.12m、深さ0.33mを測る。壁面は著しく被熱し、赤色化している。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が発達していない。西側にあるSK338とは重複しており、SK338に切られている。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。出土遺物はない。放射性炭素年代測定（AMS測定）によると、8世紀後半～9世紀（1185±20yrBP, 773～891calAD）の年代が得られている。

371号土坑（SK371, 第21図, 図版12）

B地区の北側に位置する円形の焼壁土坑で、長径0.94m、短径0.88m、深さ0.11mを測る。壁面は被熱し、やや硬化している。部分的に赤色化している箇所も確認された。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が未発達である。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。中央付近から長さ約0.6m、幅約0.15mの範囲で炭化材が、ほぼ底面直上の位置で確認された。出土遺物はない。放射性炭素年代測定（AMS測定）によると、7世紀後半～8世紀後半（1280±20yrBP, 671～770calAD）の年代が得られている。

372号土坑（SK372, 第21図, 図版11）

B地区の北端に位置する円形の焼壁土坑で、調査区外に広がる。長径1.18m、短径0.99m、深さ0.11mを測る。壁面は被熱し、やや硬化している。底面は壁面と比較して硬化が発達していない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。他の焼壁土坑と比較して、やや軟質である。出土遺物はない。

401号土坑（SK401, 第21図, 図版12）

B地区の中央に位置する円形の焼壁土坑で、長径1.26m、短径1.24m、深さ0.16mを測る。壁面は著しく被熱し、赤色化を呈している。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が発達していない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。出土遺物はない。放射性炭素年代測定（AMS測定）によると、8世紀前半～9世紀後半（1215±20yrBP, 721～885calAD）の年代が得られている。

402号土坑（SK402, 第21図）

B地区の中央に位置し、SK401から西南西へ約4.0m離れた位置で確認されている。円形の焼壁土坑で、遺存状態は不良で、僅かに被熱した壁面が確認されたにすぎない。直径1.08m、短径1.08m、深さ0.14mを測る。被熱部分は、やや硬化しており、赤色化は未発達である。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。出土遺物はない。

611号土坑（SK611, 第21図）

B地区の北側に位置する円形の焼壁土坑で、直径0.98m、短径0.92m、深さ0.21mを測る。壁面は被熱し、やや硬化している。部分的に赤色化している箇所も確認された。底面は壁面と比較して被熱度が小さく、赤色化が発達していない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物が混じる。中央付近から板状の炭化材が確認された。炭化材は底面から約0.1m上の位置で、水平の状態で確認された。出土遺物はない。放射性炭素年代測定（AMS測定）によると、7世紀後半～8世紀後半（1305±20yrBP, 661～768calAD）の年代が得られている。

B その他の土坑

1号土坑（SK1, 第22図）

A地区北側区の北側に位置する円形の土坑で、長径0.24m、短径0.22m、深さ0.22mを測る。小規模な土坑の中で、比較的深度のある土坑である。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

12号土坑（SK12, 第22図）

A地区北側区の北側に位置する楕円形の土坑で、西端は調査区外へ広がる。現存径0.28m、短径0.22m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

26号土坑（SK26, 第22図）

A地区的北側に位置する楕円形の土坑で、長径0.32m、短径0.26m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

32号土坑（SK32, 第22図）

A地区北側区の北側に位置する隅丸方形の土坑で、長径1.02m、短径0.90m、深さ0.06mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、底面付近は焼土が分布する。出土遺物はない。

46号土坑（SK46, 第22図）

A地区北側区の北側に位置する楕円形の土坑で、長径0.34m、短径0.26m、深さ0.46mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

51号土坑（SK51, 第22図）

A地区北側区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径1.32m、短径0.78m、深さ0.24mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

74号土坑（SK74, 第22図）

A地区北側区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径0.36m、短径0.28m、深さ0.44mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

119号土坑（SK119, 第22図）

A地区北側区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径0.22m、短径0.12m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

132号土坑（SK132, 第22図）

A地区北側区の中央に位置する長楕円形の土坑で、長径1.82m、短径0.84m、深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

146号土坑（SK146, 第22図）

A地区北側区の南側に位置する長楕円形の土坑で、長径1.42m、短径0.66m、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

147号土坑（SK147, 第22図）

A地区北側区の北側に位置する円形の土坑で、直径0.26m、短径0.26m、深さ0.28mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

154号土坑（SK154, 第22図）

A地区中央区の北側に位置する円形の土坑で、長径0.30m、短径0.22m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

451号土坑（SK451、第22図）

B地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径0.58m、短径0.30m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

666号土坑（SK666、第22図）

B地区の北側に位置する円形の土坑で、直径0.22m、短径0.22m、深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物には縄文土器があるが、混入と考えられる。

3 遺物

古代以降の出土遺物には土師器、須恵器、近世陶磁器があるが遺構に伴うものはない。

（1）土器・陶磁器（第23図、図版14）

出土した土器・陶磁器類は小破片が多い。このため、全容が把握できるものは無い状況である。

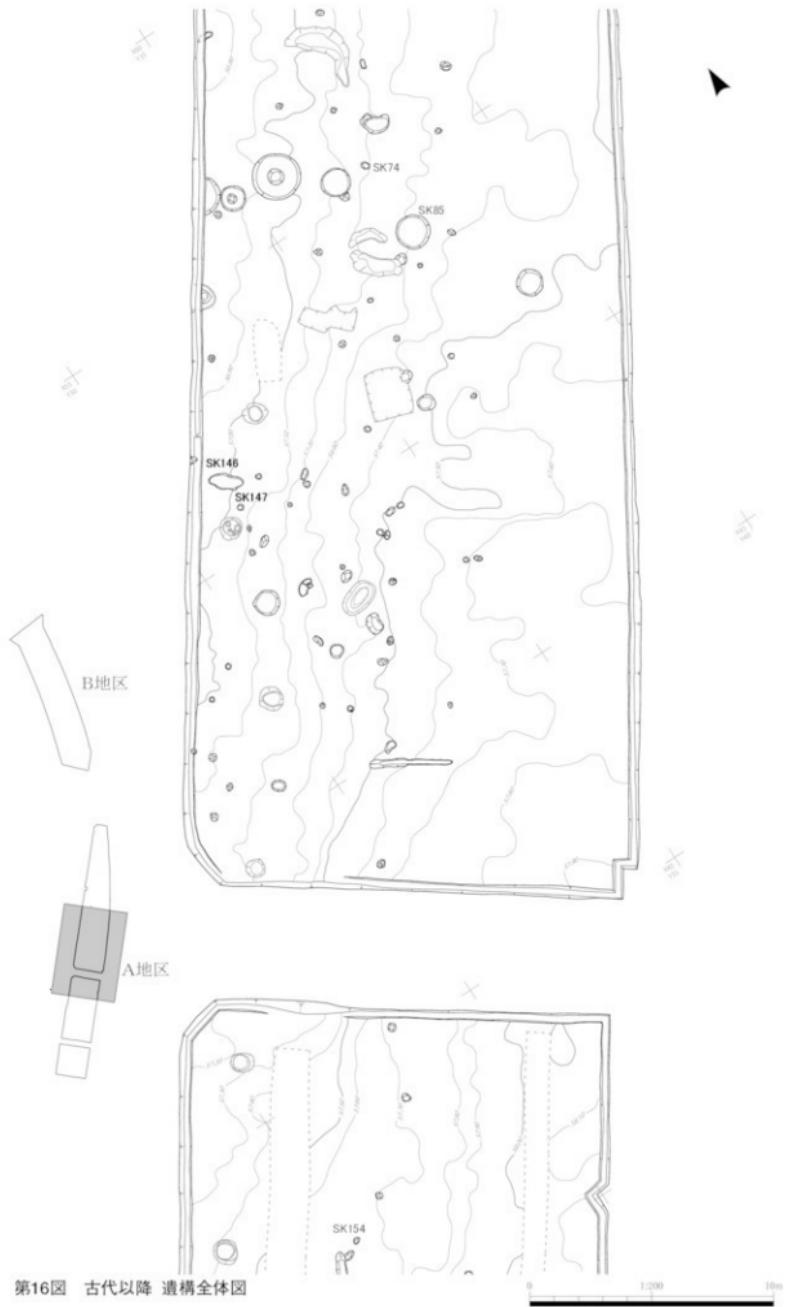
土器・陶磁器は全て包含層出土のもので、22～24は須恵器、25は土師器、26・27は陶磁器である。22は杯蓋で、口縁端部を折り曲げ垂下させる。復元口径は15.8cmで、天井部が扁平なタイプである。23・24は壺の胴部の破片で、表面にタタキ、内面に当て具痕が認められる。25は土師器の壺で、胴部破片である。外面は摩滅しているが、ケズリが施され、内面はハケメ調整である。26は伊万里の猪口の口縁部破片で、外面に染め付けが施される。27は越中瀬戸の向付で、外面に灰釉がかかる。

参考文献

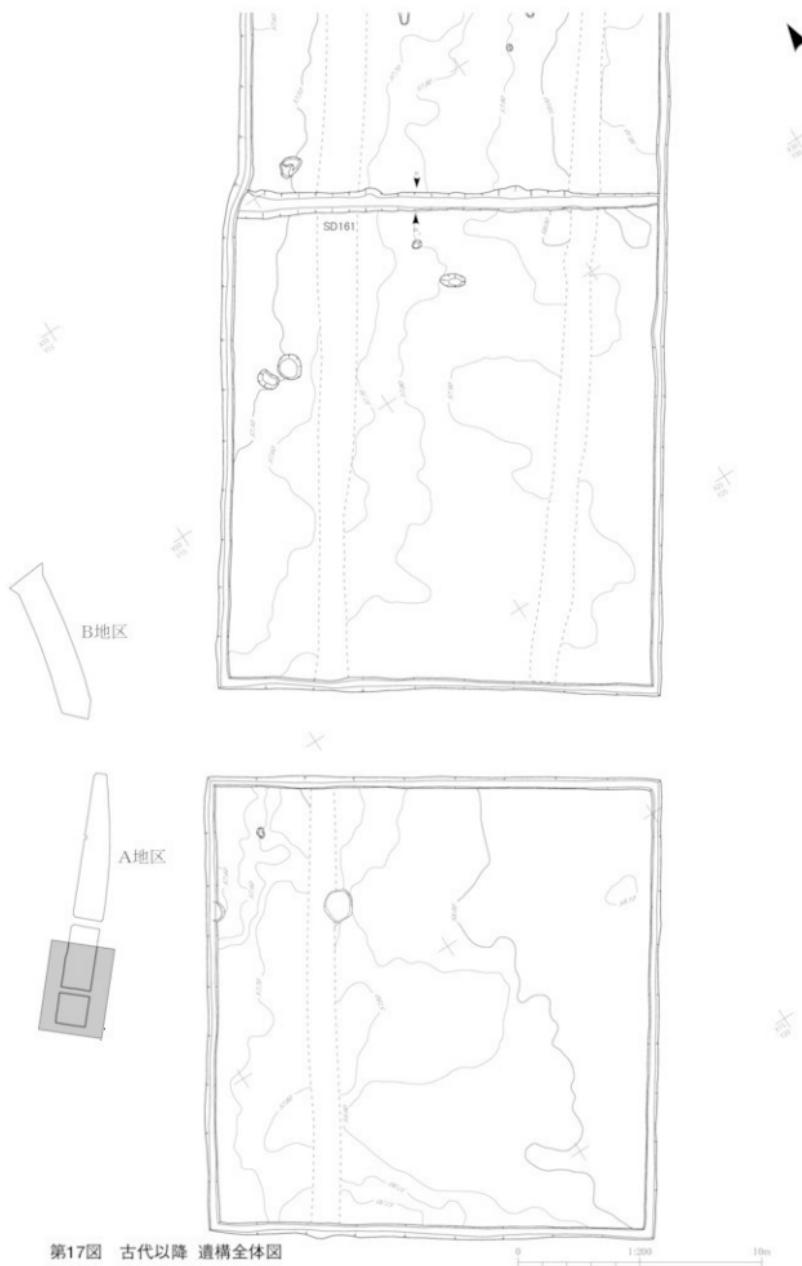
- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号 富山考古学会
 内田亜希子 2000 「越中福井郡の古代土師器煮炊具－婦中町中名I・V・VI遺跡の堅穴住出土資料を中心にして－」
 『富山考古学研究』第3号 財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
 田鶴明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・
 北陸古代土器研究会



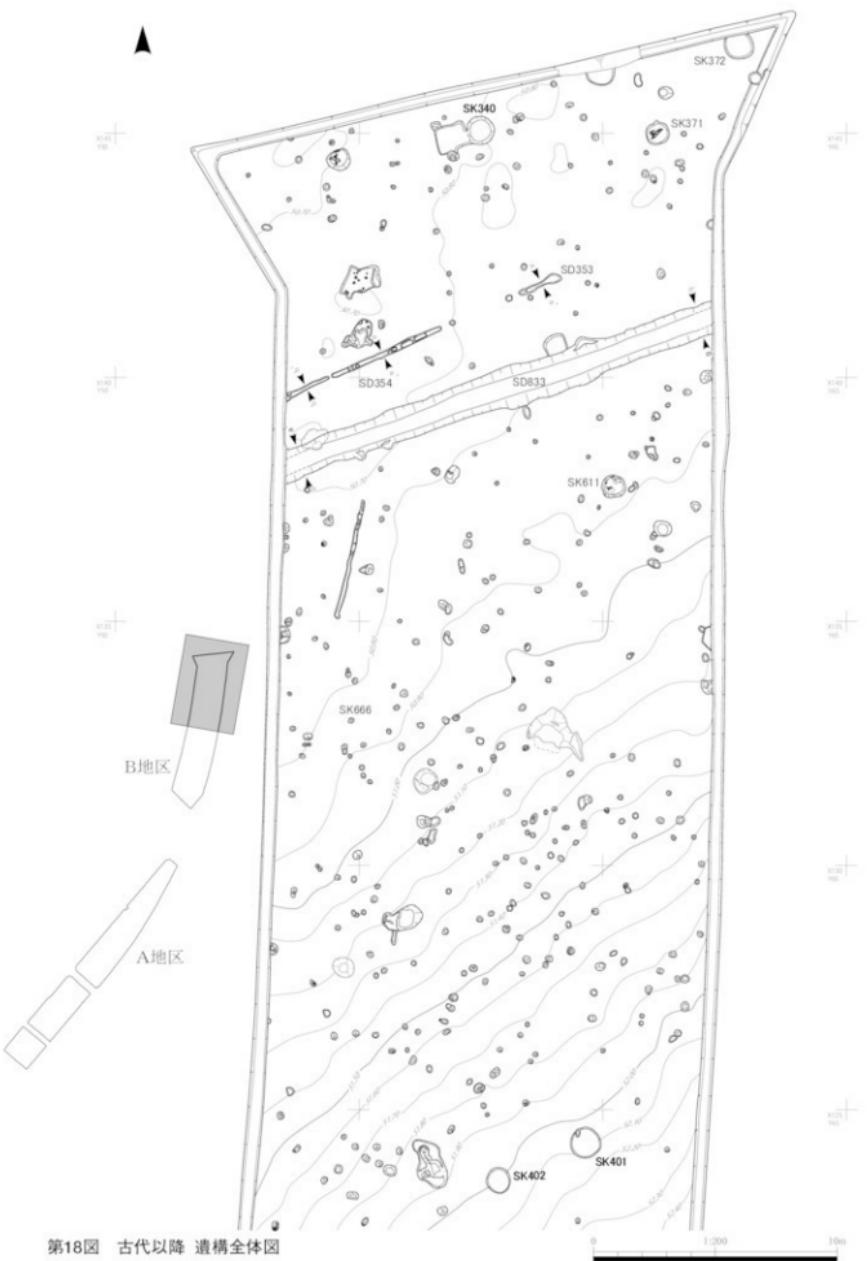
第15図 古代以降 遺構全体図



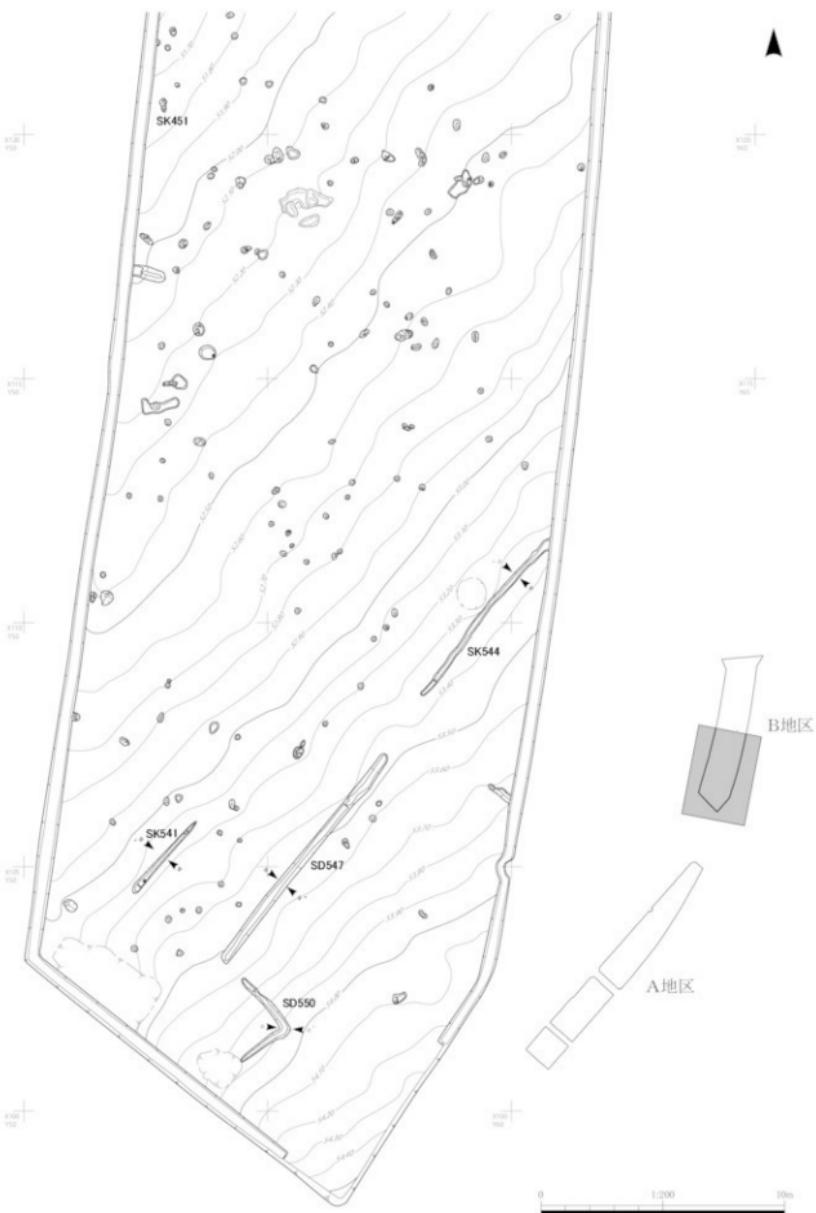
第16図 古代以降 遺構全体図



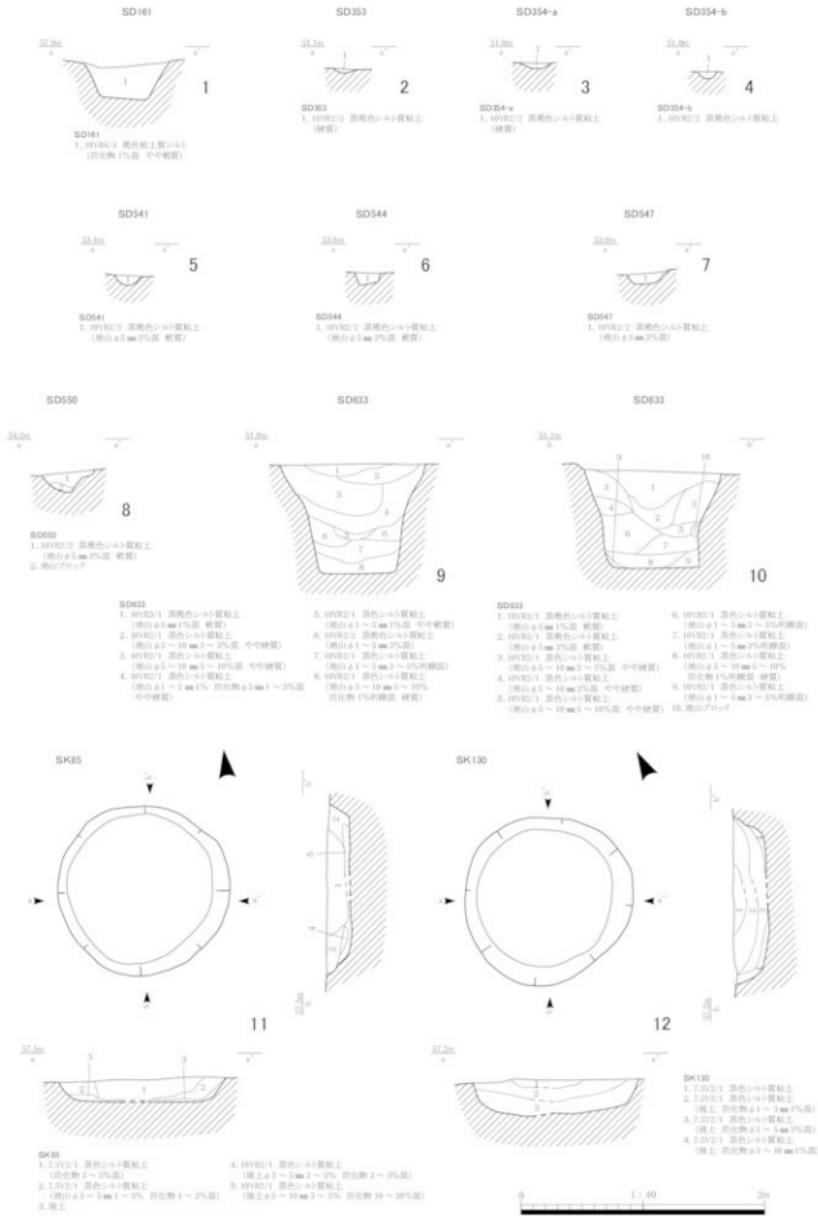
第17図 古代以降 遺構全体図

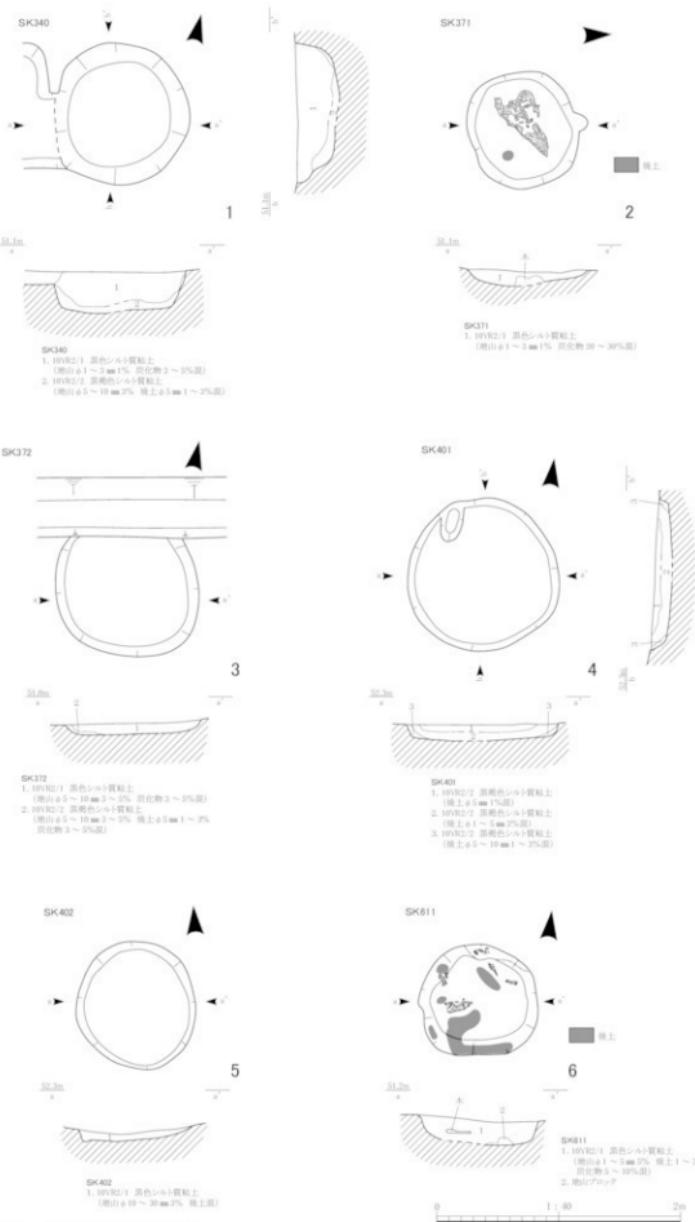


第18図 古代以降 遺構全体図



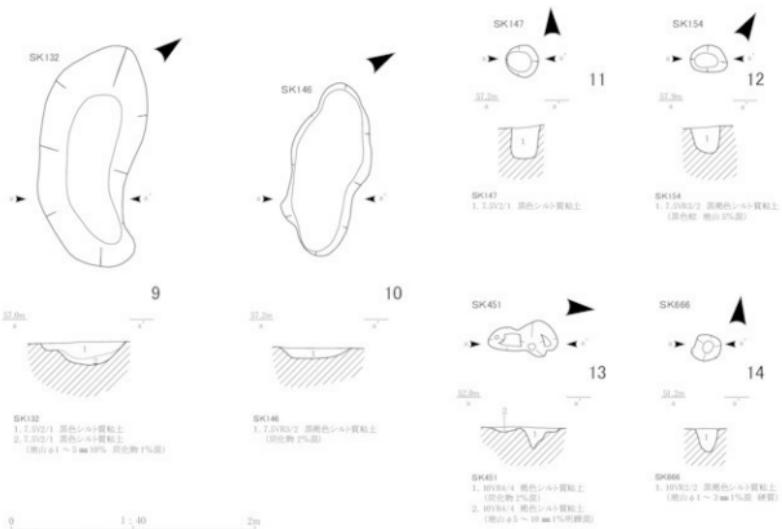
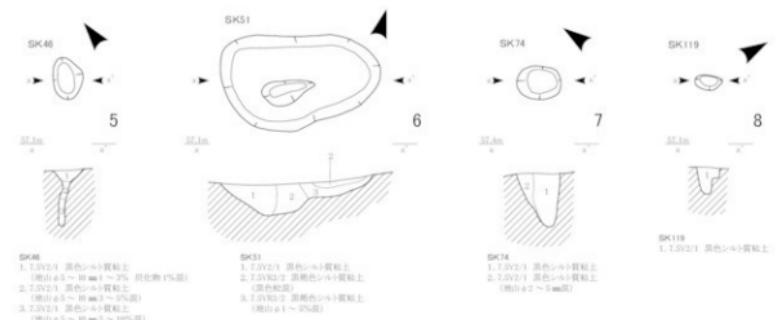
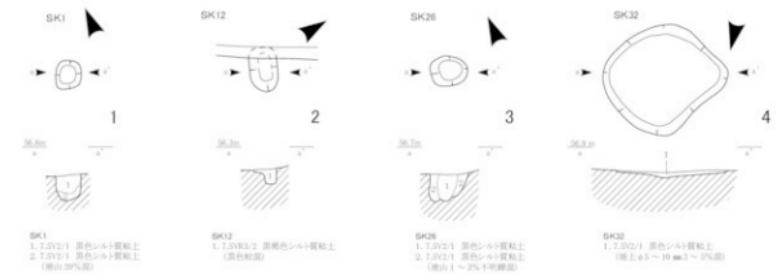
第19図 古代以降 遺構全体図





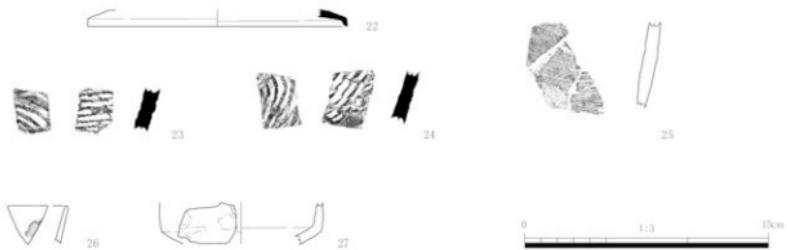
第21図 古代以降 遺構実測図

1. SK340 2. SK371 3. SK372 4. SK401 5. SK402 6. SK611



第22図 古代以降 遺構実測図

1. SK1 2. SK12 3. SK26 4. SK32 5. SK46 6. SK51 7. SK74 8. SK119 9. SK132
10. SK146 11. SK147 12. SK154 13. SK451 14. SK666



第23図 古代以降 遺物実測図 (22~27 1/3)

第10表 古代以降 溝一覧

遺構番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	切り合%	備考	排団番号	国版番号
				長径	幅	深さ						
SD161	A	SD161	縦	(17.16)	0.46~1.16	0.22~0.30	打製石器、礫石	古代以降		近世以降の溝か。	20	7
SD353	B	SD353	縦	1.86	0.42~2.40	0.02~0.06				SD833と主軸が合う。	20	
SD354	B	SD354	縦	4.92	0.16~0.30	0.02~0.04	土師器、鉛津	古代以降		SD833と主軸が合う。近現代か。 BUは長さ「19.2m」、幅0.14~0.28m、 深さ0.03~0.07m	20	
SD541	B	SD241	縦	2.88	0.18~0.38	0.06~0.10		古代以降			20	
SD544	B	SD244	縦	8.14	0.26~0.32	0.04~0.10		古代以降			20	
SD547	B	SD247	縦	10.78	0.38~0.46	0.07~0.11		古代以降			20	
SD650	B	SD250	縦	4.92	2.20~3.60	0.05~0.20		古代以降			20	11
SD833	B	SD353	縦	(18.40)	12.20~17.60	0.80~0.90		古代以降	<SK380	断面造立部。底部付近の埋土は硬化したような部分が分布。近現代か。	20	11

第11表 古代以降 土坑一覧

遺構番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合%	排団番号	国版番号
				長径	幅	深さ						
SK1	A	SK1	円	0.24	0.22	0.22		古代以降			22	
SK12	A	SK12	楕円	0.28	0.22	0.14		古代以降			22	
SK26	A	SK26	楕円	0.32	0.26	0.22		古代以降			22	
SK32	A	SK32	楕丸方	1.02	0.90	0.06		古代以降	埋土に埴土混じる		22	
SK46	A	SK46	楕円	0.34	0.26	0.46		古代以降			22	
SK51	A	SK51	楕円	1.32	0.78	0.24		古代以降			22	
SK74	A	SK74	楕円	0.36	0.28	0.44		古代以降			22	
SK85	A	SK85	円	1.39	1.39	0.20		古代	焼土土坑		20	7
SK119	A	SK119	楕円	0.22	0.12	0.22	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	
SK130	A	SK130	円	1.39	1.36	0.29	縄文土器	古代	焼土土坑。AMSでは7世紀後半~9世紀中頃		20	
SK132	A	SK132	楕円	1.82	0.84	0.20	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	
SK146	A	SK146	楕円	1.42	0.66	0.08	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	
SK147	A	SK147	円	0.26	0.26	0.28		古代以降			22	
SK154	A	SK154	円	0.30	0.22	0.22	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	
SK340	B	SK40	円	1.18	1.12	0.33	縄文土器	古代	焼土土坑で壁面著しく被熱。AMSでは8世紀後半~9世紀	<SK338	21	11
SK371	B	SK71	円	0.94	0.88	0.11		古代	焼土土坑で、炭化材出土。AMSでは7世紀後半~8世紀後半		21	12
SK372	B	SK72	円	1.18	0.99	0.11	縄器	古代	焼土土坑で、炭化材出土。AMSでは7世紀後半~8世紀後半		21	11
SK401	B	SK101	円	1.26	1.24	0.16		古代	焼土土坑で壁面著しく被熱。AMSでは8世紀前半~9世紀後半		21	12
SK402	B	SK102	円	1.08	1.08	0.14		古代	焼土土坑であるが残力が悪い。AMSでは8世紀前半~9世紀後半		21	
SK451	B	SK151	楕円	0.58	0.30	0.18	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	
SK611	B	SK311	円	0.98	0.92	0.21		古代	焼土土坑で、炭化材出土。AMSでは7世紀後半~8世紀後半		22	
SK666	B	SK366	円	0.22	0.22	0.20	縄文土器	古代以降	縄文土器は混入		22	

第12表 古代以降 土器・陶磁器一覧

排団番号	遺物	国版番号	地区	出土土地点	種類	器種	法量 (cm)			時期	詳細時期	胎土色調	胎土色	備考
							復元 口径	器高	底径					
23	22	14	A	X74Y49	I	須恵器	杯蓋	15.8	(1.0)	0.4	古代	8代	25Y6/1	黄灰色
	23	14	B	X143Y61	II	須恵器	甕	(2.5)		0.8	古代		10YR5/2	灰黃褐色
	24	14	B	X143Y61	II	須恵器	甕	(3.2)		0.8	古代		10YR5/2	灰黃褐色
	25	14	B	X143Y61	II	土師器	甕	(5.3)		0.8	古代		10YR7/4	にぶい黄褐色
	26	14	B	X120Y54	I	伊万里	瓶口	(2.3)		0.3	近世		25Y7/1	灰白色
	27	14	B	X112Y52	I	越中瀬戸	向付	(2.5)		0.6	近世		10YR6/3	にぶい黄褐色

第V章 自然科学分析

1 A地区放射性炭素年代測定

(1) はじめに

富山県富山市に位置する野下・新開遺跡A地区から検出された土器付着炭化物や焼壁土坑について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定対象試料は、土坑から出土した木炭、土器外面付着炭化物の合計4点である（第13表）。土器付着炭化物を外面から採取した。

木炭試料1が出土した130号土坑は、側面と底面に焼けた痕跡が認められる焼壁土坑で、埋土中に炭化物が含まれる。出土遺物がないため、時期の特定が困難であるが、周辺遺跡の類似遺構は年代測定によって7世紀半ばから8世紀半ばとされる。

木炭試料2、土器外面付着炭化物試料3、4が出土した167号土坑は、側面と底面に焼けた痕跡が認められ、埋土に炭化物が含まれる浅い土坑である。焼壁土坑に似た特徴を持つが、出土土器は縄文時代晩期に位置づけられる。

(3) 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ②酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第13表に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

① $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した

値である（第13表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

②¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第13表に、補正していない値を参考値として第14表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

③pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第13表に、補正していない値を参考値として第14表に示した。

④曆年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第14表に示した。曆年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（6）測定結果

測定結果を第13、14表に示す。

130号土坑出土試料1の¹⁴C年代は 1240 ± 20 yrBP、曆年較正年代（ 1σ ）は693～855cal ADの間に4つの範囲で示される。周辺遺跡で検出された類似遺構の測定例と重なる年代値となっている。

167号土坑出土試料の¹⁴C年代は、試料2が 3560 ± 30 yrBP、試料3が 2540 ± 20 yrBP、試料4が 2500 ± 30 yrBPである。試料3と4の値は誤差（ $\pm 1\sigma$ ）の範囲で一致するが、これらと試料2の値は離れている。曆年較正年代（ 1σ ）は、試料2が縄文時代後期前葉頃、試料3、4が縄文時代晚期中葉から後葉頃に相当する（小林編2008）。土器の考古学編年上の時期と付着炭化物の年代値は整合するが、同じ土坑から出土した木炭の年代値とは一致せず、土坑の埋没過程等について検討を要する。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える、化学処理、測定上の問題は認められない。

なお、本分析の試料は、公益財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所にて株式会社加速器分析研究所の管理技術者山田しょうが貸与された。その後、同社にて小原圭一らが必要量の試料を採取し、化学処理、測定、算出の作業を行った。本報告は、山田、小原との協議を踏まえ、早瀬亮介が執筆した。

（株式会社加速器分析研究所 早瀬亮介・小原圭一・山田しょう）

第13表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA-140242	試料1	130号土坑 (SK130)	木炭	AAA	-25.90±0.45	1,240±20	85.71±0.25
IAAA-140243	試料2	167号土坑 (SK167)	木炭	AAA	-26.03±0.39	3,560±30	64.21±0.20
IAAA-140244	試料3	167号土坑 (SK167)	土器外面付着炭化物	AaA	-23.46±0.36	2,540±20	72.91±0.23
IAAA-140245	試料4 (予備)	167号土坑 (SK167)	土器外面付着炭化物	AaA	-24.19±0.57	2,500±30	73.29±0.23

[#6621]

第14表 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	pMC (%)	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暈年代範囲		2 σ 暈年代範囲	
				693calAD-748calAD (46.1%)	762calAD-777calAD (12.8%)	793calAD-802calAD (4.7%)	845calAD-855calAD (4.6%)
IAAA-140242	1,250±20	85.55±0.23	1,238±23	693calAD-748calAD (46.1%)	762calAD-777calAD (12.8%)	793calAD-802calAD (4.7%)	845calAD-855calAD (4.6%)
IAAA-140243	3,580±20	64.08±0.20	3,558±25	1942calBC-1883calBC (68.2%)	1942calBC-1883calBC (68.2%)	2009calBC-2001calBC (1.0%)	1976calBC-1872calBC (81.8%)
IAAA-140244	2,510±20	73.14±0.22	2,537±24	794calBC-752calBC (45.5%)	682calBC-669calBC (9.9%)	796calBC-743calBC (47.7%)	686calBC-665calBC (12.0%)
IAAA-140245	2,480±20	73.41±0.22	2,496±25	762calBC-745calBC (8.8%)	687calBC-665calBC (11.0%)	774calBC-540calBC (95.4%)	645calBC-552calBC (35.8%)

[参考値]

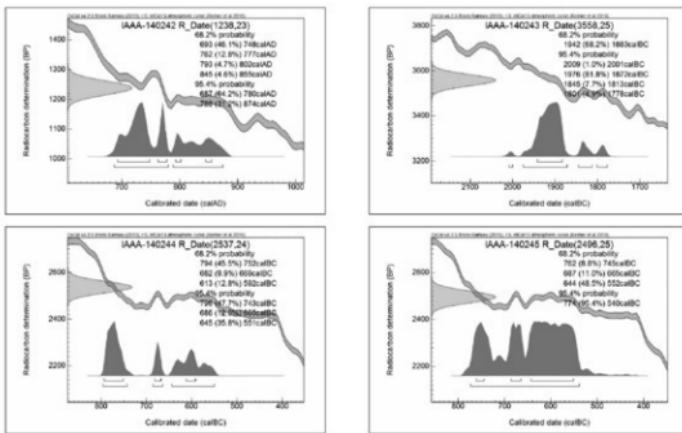
文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

小林達雄編 2008 縦覧縄文土器、縦覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP.

Radiocarbon 55 (4), 1869-1887Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{13}C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



第24図 曆年較正年代グラフ

2 B地区放射性炭素年代測定

(1)はじめに

富山県富山市に位置する野下・新開遺跡B地区の焼壁土坑から検出された試料について、加速器質量分析（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

焼壁土坑4基から炭化材が1点ずつ測定に供された。炭化材はいずれも広葉樹であった。SK340の炭化材（PLD-29276）とSK401の炭化材（PLD-29278）は、最終形成年輪が確認された。SK371の炭化材（PLD-29277）とSK611の炭化材（PLD-29279）は、最終形成年輪が確認できなかった。測定試料の情報、調製データは第15表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第15表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29276	試料No1 地区名：B 遺構：SK340（焼壁土坑）	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：10N,塩酸：12N）
PLD-29277	試料No2 地区名：B 遺構：SK371（焼壁土坑）	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：10N,塩酸：12N）
PLD-29278	試料No3 地区名：B 遺構：SK401（焼壁土坑）	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：10N,塩酸：12N）
PLD-29279	試料No4 地区名：B 遺構：SK611（焼壁土坑）	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：10N,塩酸：12N）

(3) 結 果

第16表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第25図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、

OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第16表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-29276 SK340 試料No.1	-25.88 \pm 0.20	1184 \pm 20	1185 \pm 20	778-792 cal AD (12.7%) 803-843 cal AD (33.6%) 858-883 cal AD (21.9%)	773-891 cal AD (95.4%)
PLD-29277 SK371 試料No.2	-25.13 \pm 0.20	1281 \pm 21	1280 \pm 20	685-715 cal AD (38.4%) 744-766 cal AD (29.8%)	671-770 cal AD (95.4%)
PLD-29278 SK401 試料No.3	-25.87 \pm 0.25	1214 \pm 20	1215 \pm 20	771-779 cal AD (7.0%) 790-868 cal AD (61.2%)	721-740 cal AD (7.3%) 766-885 cal AD (88.1%)
PLD-29279 SK611 試料No.4	-27.48 \pm 0.22	1305 \pm 21	1305 \pm 20	666-710 cal AD (48.8%) 746-764 cal AD (19.4%)	661-722 cal AD (67.2%) 741-768 cal AD (28.2%)

(4) 考 察

以下、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、遺構ごとに結果を整理する。

SK340の炭化材（PLD-29276）は、 2σ 暦年代範囲が773-891 cal AD (95.4%)で、8世紀後半～9世紀末であった。

SK371の炭化材（PLD-29277）は、 2σ 暦年代範囲が671-770 cal AD (95.4%)で、7世紀後半～8世紀後半であった。

SK401の炭化材（PLD-29278）は、 2σ 暦年代範囲が721-740 cal AD (7.3%)および766-885 cal AD (88.1%)で、8世紀前半～9世紀後半であった。

SK611の炭化材（PLD-29279）は、 2σ 暦年代範囲が661-722 cal AD (67.2%)および741-768 cal AD (28.2%)で、7世紀後半～8世紀後半であった。

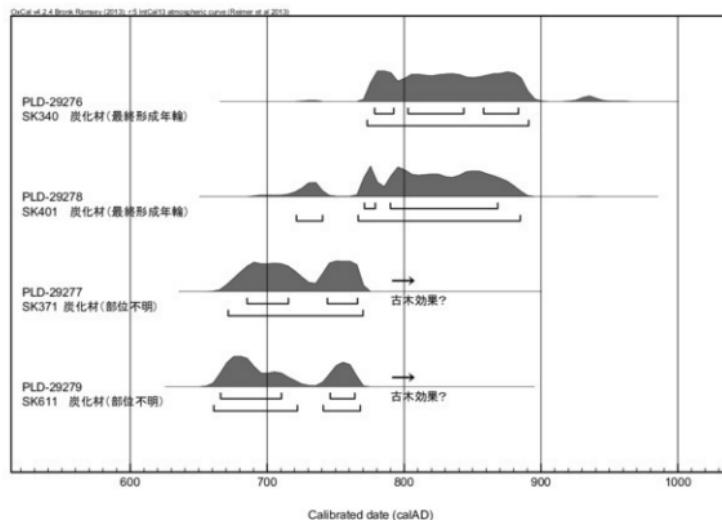
なお、木材は測る年輪によって異なる¹⁴C年代が得られる。すなわち、樹皮直下の最終形成年輪を測れば、木材の伐採年（枯死年）が得られる。一方、内側の年輪を測れば、どの程度内側かに応じて、伐採年（枯死年）よりも古い年代が得られる。これは古木効果と呼ばれる。今回測定した木材のうち、SK371の炭化材（PLD-29277）とSK611の炭化材（PLD-29279）は最終形成年輪が確認できていないため、古木効果の影響により古い年代が得られている可能性がある。

（株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ 伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎）

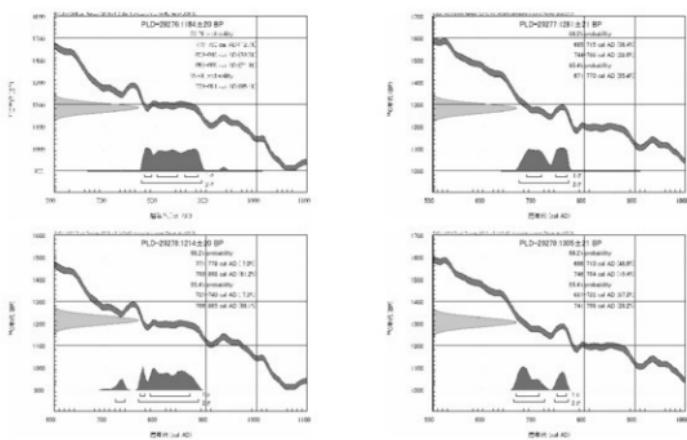
参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本国第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L.,

Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.



第25図 焼壁土坑出土試料の曆年較正結果



第26図 曆年較正結果

第VI章 総括

野下・新開遺跡では縄文時代から中近世にかけての遺構・遺物が確認されているが、ここでは、大きく縄文時代と古代についてまとめて総括としたい。縄文時代の落とし穴状土坑と倒木痕については近隣遺跡で確認されたものを集成し、更に周辺遺跡の様相についても若干ふれてみる。

1 縄文時代の遺構について

遺構としては落とし穴状土坑が確認されている。時期については、遺物が出土しないことから決定が困難である。規模は直径0.6~1.2mと小規模であることから、中世における伏兵を隠すための穴との指摘もある^{注1}。しかし、北押川C遺跡の平成13年度調査ではSE07埋土から出土した炭化物から5,990BPの年代値が得られている^{注2}。また、同じく北押川C遺跡の平成19年度調査ではSK05で7,130年前、SK17で9,420年前の年代が得られている^{注3}。このような周辺遺跡の状況から、野下・新開遺跡の落とし穴状土坑の時期を推定した場合、やはり縄文時代の所産である蓋然性が高いと考えられる。

(1) 落とし穴状土坑について

ここでは、野下・新開遺跡の落とし穴状土坑についてまとめ、次に周辺遺跡の落とし穴状土坑の様相について述べていく。野下・新開遺跡A地区とB地区から15基の落とし穴状土坑が確認された。断面形による形態的な分類については池多東遺跡で日星氏が用いたものを準用しA~Dの4つに分類した^{注4}。AからCは池多東遺跡の分類と同じであり、A類は開口部が広く、底部は狭く、鉢鉢状を呈する。B類は開口部から底部にかけて、壁が直立する。C類は開口部から底部にかけて、壁が直立し、中ほどで外側に抉れ、袋状を呈す。A類～C類の底面はいずれも平坦である^{注5}。Dは池多東遺跡に無いタイプで、底辺が丸底を呈するものである。野下・新開遺跡の場合A類はSK162、SK183、SK714、SK808、SK832の5基、B類はSK185、SK186、SK190、SK191、SK193の5基、C類はSK166、SK169、SK192の3基、D類はSK179の1基、不明1基(SK189)であった。平面形は概ね楕円が多く、法量は径0.6~1.2m、深さ1.0~1.5mに集中している。配置は直線的でA～C列の3列が確認されており、落とし穴状土坑は配列された主軸に対して長径を横向きに配置されている。また、各系列は等高線に対してほぼ平行に構築されている。時期については出土遺物が無く、切り合いも無いため不明な部分が多い。北陸地方では富山市追分茶屋遺跡のもので縄文時代中期前葉、石川県シャコデ遺跡で前期～後期の土器が出土しており、前期～中期に盛行していたと指摘している^{注6}。また、北押川C遺跡では放射性炭素年代測定（AMS）を実施しており、SK05で7,130年前、SK17で9,420年前であった。このうちSK17の資料は混入の可能性もあるとされている^{注7}。野下・新開遺跡の調査では、当初、平岡遺跡との関連性を考えていたが、包含層などから出土した土器は、縄文時代中期後葉～後期前葉と晚期であった。北陸地方では多くが前期～中期を中心に構築されていることから、晚期と言うよりは中期後葉～後期前葉に作られた可能性が考えられる。このことから、前期の平岡遺跡との関連よりは、中期中葉～後葉の池多東遺跡や上堤池遺跡との関連性を考えた方が妥当のように思われる。

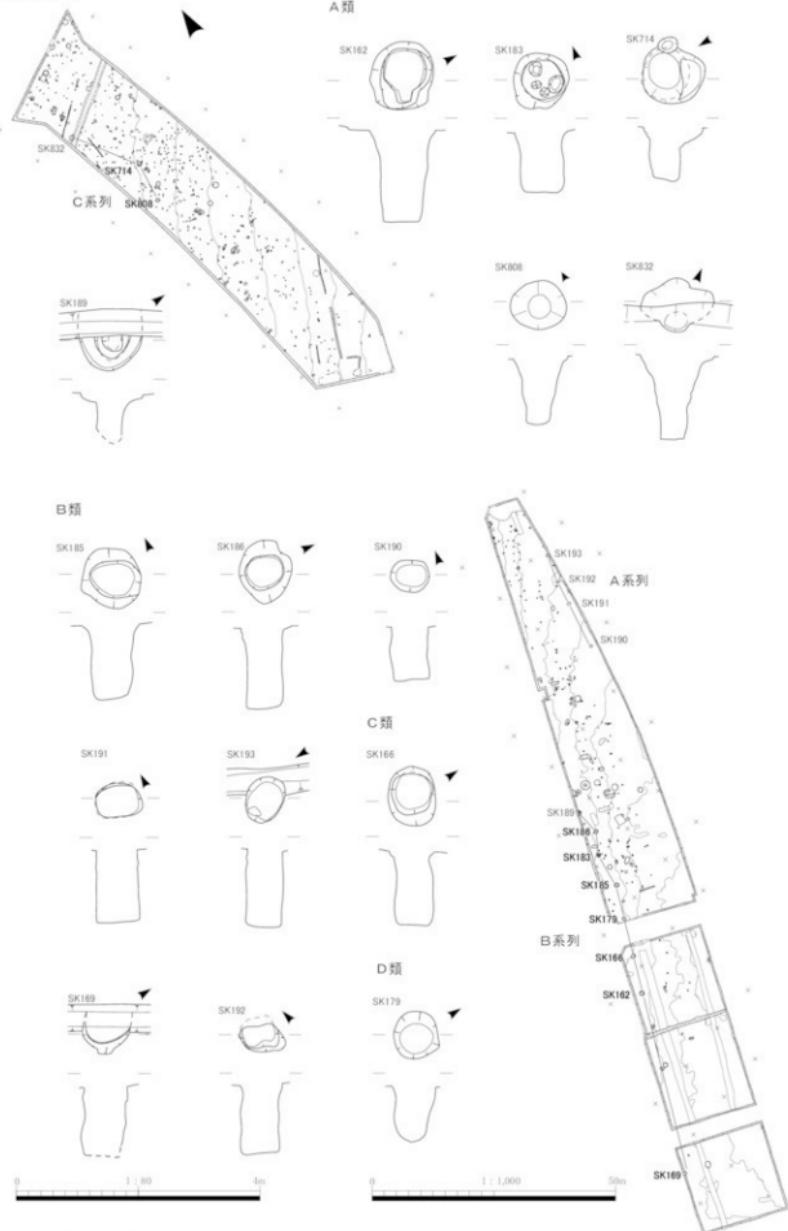
－周辺遺跡の様相－

周辺遺跡の落とし穴状土坑については既に集成済み^{注8}であるが、ここでは落とし穴状土坑の立地についてもまとめてみることにする。地形的にみると低位段丘・隆起肩状地に立地する遺跡で落とし穴状

土坑が確認されているのは池多東遺跡、北押川C遺跡、向野池遺跡^{10,9}がある。また、中位段丘上には野下・新開遺跡^{11,10}、高位段丘には開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡、開ヶ丘中遺跡^{11,12}がある。野下・新開遺跡は過去の調査を含めると計24基、北押川C遺跡12基¹²、池多東遺跡8基、向野池遺跡5基、開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡1基、開ヶ丘中遺跡1基が確認されている。調査面積に対する検出された遺構数は、最も高い野下・新開遺跡で305m²当たり1基分布する計算となる。次に北押川C遺跡は586m²当たり1基、池多東遺跡は639m²当たり1基、向野池遺跡は1,950m²当たり1基、開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡は4,110m²当たり1基、開ヶ丘中遺跡は13,013m²当たり1基となっており、野下・新開遺跡の密度の高さが窺える。次に分類についてであるが、野下・新開遺跡の過去の調査では9基中A類が1基、C類が8基であった。北押川C遺跡では12基中8基でA類が多く、次にB類が3基、C類が1基となっている。池多東遺跡では8基中A類3基、C類3基、B類2基であった。向野池遺跡は5基中A類が4基、D類が1基であった。開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡ではA類が1基、開ヶ丘中遺跡ではE類（底面に小穴を有するもの）が1基であった。このようにみると、傾向としてはA類を主体として構築されていることが指摘できる。次に規則性をみると、直線的に配置されている遺跡としては野下・新開遺跡、池多東遺跡、北押川C遺跡の3遺跡で、いずれも勾配の緩い中位～低位段丘・隆起扇状地に立地する遺跡である。野下・新開遺跡は南北から南西～北東方向に配列されており、特にA地区や過去の調査地では、棱線状の微地形に対して概ね平行に近い主軸を維持している。池多東遺跡では1列確認されており、東西方向に延びている。等高線に対しては垂直気味に延びており、個々の配置は配列に対して横長（長径）となっている。北押川C遺跡は1列確認されており、東西方向に配置されている。等高線に対しては平行からやや斜めに延びている。配置は配列に対して横長である。また、規則的に配置された落とし穴状土坑の法量をみてみると、径と深さにおいてある程度規格的であり、小規模に集中する傾向がある（第31図参照）。その一方で、散在する落とし穴状土坑は規格性に乏しい（例えば向野池遺跡）。また、野下・新開遺跡や向野池遺跡の例では径が大きくなれば、深さも深くなることが言える。その一方で、北押川C遺跡や池多東遺跡は径が大きても深さは変化しない。また、配列に対して穴の平面形が横長であることは、共通点として上げられよう。立地については、等高線に対して平行あるいは垂直方向である。落とし穴は一般的に獣道に設置されることが多く、これらも獣道に設置されたと考えられる。ただし、配列の方向が等高線に対して平行もしくは垂直方向とそれぞれ異なっていることについては、設置時期の違いによる可能性も考えられる。また、配列された落とし穴状土坑はいずれも小規模であり、ある程度の規格性をもっている。これは、同時期に構築されており、作り手も同じグループであった可能性が指摘できる。逆に規模や形態に相違があれば、狩猟対象の違い、時期・作り手の違いによるものと考えられる。

それではいったい何を狩猟目的にしていたのだろうか。池多東遺跡では直線的な配列からイノシシの可能性を指摘している¹³。時期は異なるが野下・新開遺跡から北へ7kmにある小竹貝塚（前期）出土の動物遺体を参考に考えてみる。小竹貝塚では陸棲哺乳類の中でニホンジカが最も多く出土している¹⁴。イヌの個体も多く出土している。従来、貝塚から出土するイヌの特徴は歯が著しく摩耗していて損傷や欠損している個体が見られることから、イノシシ狩りとの関連が指摘されてきた。小竹貝塚のイヌはこのような特徴が見当たらないことから、イノシシ獵の遺存度は小さいことが指摘されている。このように、小竹貝塚ではニホンジカを主体とした狩猟体系が想像できるのだが、野下・新開遺跡周辺で確認された落とし穴状土坑がイノシシを対象としたものか、ニホンジカなのか、あるいは他の動物なのかという根本的な疑問については不明と言わざるを得ない。現状では、主要な狩猟対象をニホンジカとイノシシの両方を考えおくことが妥当と考えられる。今後の更なる資料の増加を待って、再検討が必要であろう。

野下遺跡



第27図 落し穴状土坑集成 1

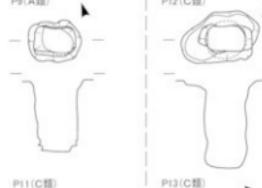
1 縄文時代の遺構について

野下遺跡（野下・新開遺跡）

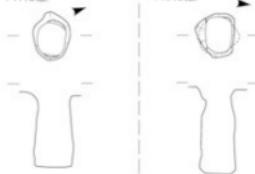
昭和50年度調査

第2地区

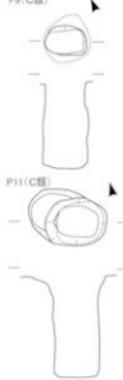
P1(A類)



P11(C類)



P9(C類)

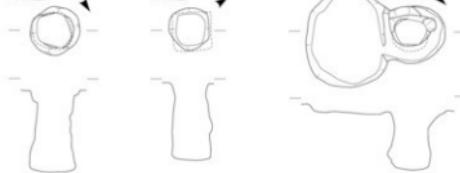


P11(C類)



第4地区

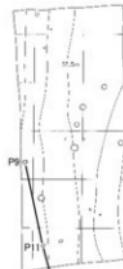
P4(C類)



P5(C類)



P21(C類)



第2地区



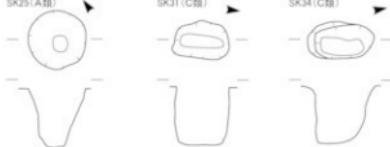
第3地区

第4地区

0 1 : 1,000 50m

池多東遺跡

SK25(A類)



SK31(C類)



SK34(C類)



SK38(A類)



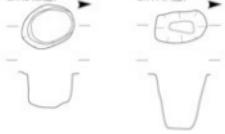
SK33(C類)



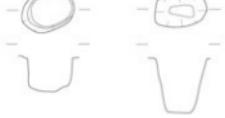
SK39(B類)



SK40(B類)



SK41(A類)



0

1 : 80

5m

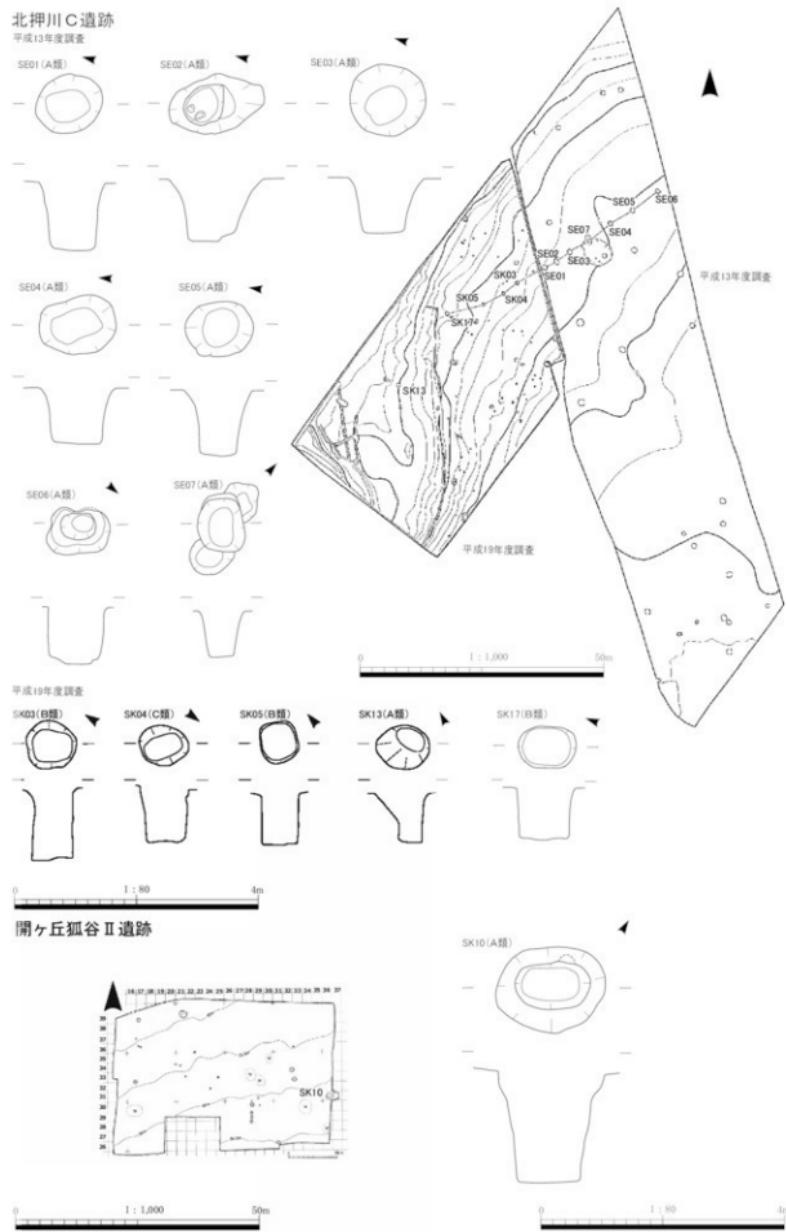


0

1 : 1,000

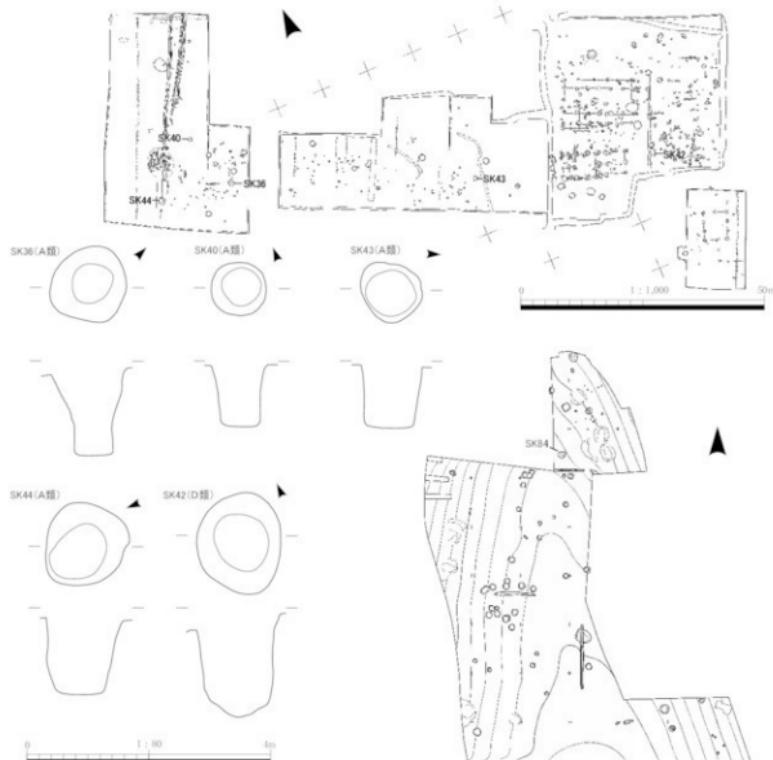
50m

第28図 落とし穴状土坑集成 2

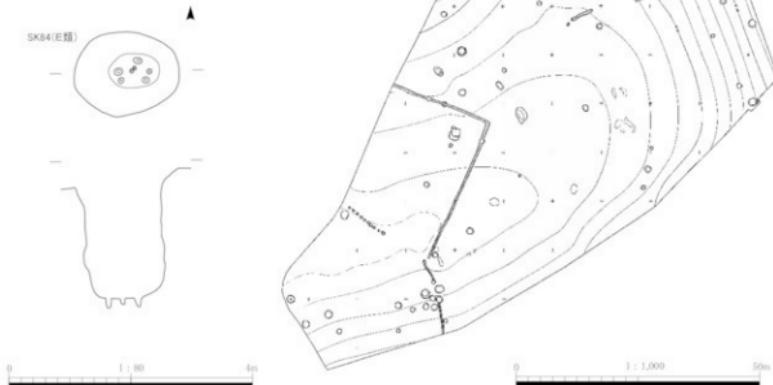


第29図 落とし穴状土坑集成 3

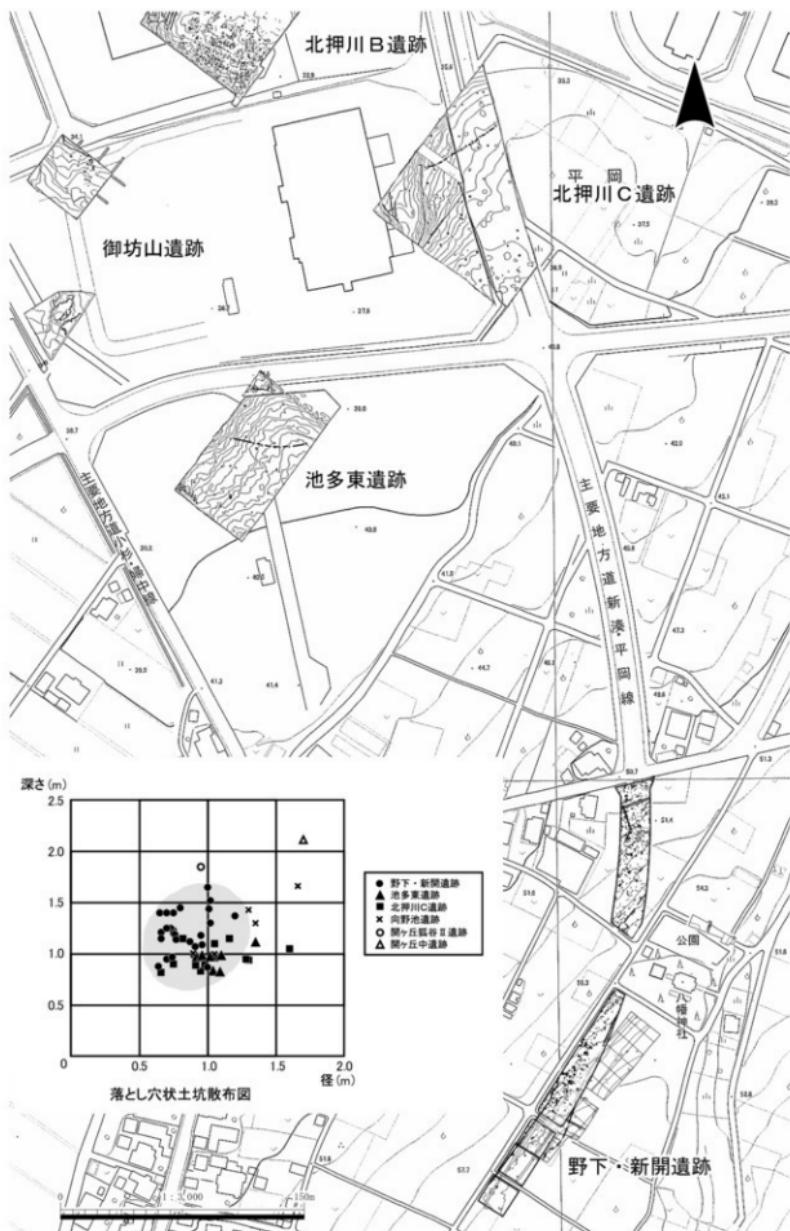
向野池遺跡



開ヶ丘中遺跡



第30図 落とし穴状土坑集成 4



第31図 周辺遺跡発掘調査位置図

(2) 倒木痕について

野下・新開遺跡の周辺の遺跡から倒木痕として確認された遺跡は多いが、積極的に調査されることはほとんど無く、記述や図面等が掲載されている報告書も少ない。ここでは、野下・新開遺跡で確認された倒木痕についてまとめ、周辺遺跡の事例についてもまとめてみる。

野下・新開遺跡では倒木痕とみられるものはA地区で3基、B地区で2基の合計5基が確認されている。平面形は三日月状が2基、()状が2基、環状が1基である。倒伏した方向については、三日月状で円弧の外側方向と推定される。また、()状は深い穴の方向に倒伏したとみられ、断面を観察すると基盤層を抉ることによって生じるオーバーハングの形状が確認される。環状の1基は倒伏方向が不明であった。また、これらの倒木痕の原因としては風によって倒伏したと考えるのが妥当とみられる。以上のことを踏まえて倒伏方向を推定すると、SX71・SX455・SX724の3基は北から北東方向に倒伏したと推定される。このことから、SX71・SX455・SX724は南から南西方向の強風で、SX87は北方向からの強風でそれぞれ倒伏したと推定される。

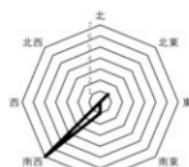
次に周辺遺跡についてみてみる。倒伏方向を推定するための図面類が掲載されている報告は見当たらないが、池多東遺跡の垂直写真から倒伏方向が判別できる倒木痕が5基抽出できた¹⁵⁾。平面形は円形で、円弧に沿って内側の約半分が三日月状に深くなっているものが3基(No2・4・5)、()状が2基(No1・3)の合計5基である。深く抉れている方向に倒伏したと考えられるので、風向きは全て南西の強い風で倒伏したと考えられる。倒伏した時期については、出土遺物が無い上に、切り合いなども生じていないため、具体的な時期は不明である。野下・新開遺跡では埋土が安定しており、比較的硬質である特徴から縄文時代とした。北押川B遺跡では風倒木痕の堆積物が赤色化しており被熱した可能性があることから、地磁気年代推定を実施している¹⁶⁾。その結果、風倒木痕1062では760年もしくは960年頃の年代が推定されている。また、風倒木痕1083では8世紀後半か10世紀頃の年代が推定され、いずれも古代に倒伏したと推定されている。こうしてみると、倒木痕については縄文時代以降のさまざまな時期を想定しなければならない。



第32図 池多東遺跡倒木痕

遺跡名	地 区	標 号	倒伏方向	風向き	備 考
野下・新開遺跡	A	SX71	北	南西	
		SX87	南西	北東	
		SX113	—	—	
池多東遺跡	B	SX455	北	南	
		SX724	北東	南西	
		()痕木1	北東	南西	
		()痕木2	北東	南西	
		()痕木3	北東	南西	
		()痕木4	北東	南西	
		()痕木5	北東	南西	

第17表 倒木痕一覧



第33図 推定される風向き

(3) 周辺の縄文遺跡の様相

ここでは、周辺遺跡一帯の縄文集落の様相について述べ、野下・新開遺跡の位置づけを考えてみたい。

まず、当該地域の地形分類から丘陵・高位段丘、中位段丘、低位段丘・隆起扇状地の大きく3つに分けて、各時期毎における様相についてもまとめてみる。なお、遺跡の抽出は概ね早期・前期・中期・後期・晚期の4時期が判別している遺跡のみを対象とし、漠然と縄文時代としか表記されていないものについては除外した。

丘陵・高位段丘：野下・新開遺跡より北東の方向にある丘陵上には、後・晚期の土器が出土している杉谷古墳群がある。高位段丘の形状は舌状を呈し、上面は平坦面である。遺跡はその平坦面に展開しており、開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡、開ヶ丘中山Ⅰ遺跡、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡、開ヶ丘中山Ⅳ遺跡、解析谷を挟んで池多南遺跡が分布している。この丘陵・高位段丘では中期頃から遺跡の進出が顕著である。中期を代表する開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は、多くの建物が確認されていることから一帯の中心的な集落の一つと考えられる。また、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡と同時期に小集落が営まれていた開ヶ丘中山Ⅲ遺跡と池多南遺跡があり、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡との関連性が窺える。後期と晚期では開ヶ丘中山Ⅰ遺跡があり、小規模集落が営まれていた。

中位段丘：中位段丘上にある遺跡は、野下・新開遺跡と平岡遺跡が該当する。平岡遺跡は野下・新開遺跡の南側に立地しており、前期後半の拠点的集落で、周辺一帯の中心的な集落である。この平岡遺跡からは、早期と晚期の土器も認められている。野下・新開遺跡では落とし穴状土坑といった狩猟の場として利用され、中期と晚期の土器が認められる。

低位段丘・隆起扇状地：多くの遺跡が展開しており、北押川B遺跡、北押川C遺跡、池多東遺跡、向野池遺跡、境野新遺跡、杉谷67番遺跡、御坊山遺跡、北押川・墓ノ段遺跡、上堤池遺跡で構成されている。北押川C遺跡は前期後半、池多東遺跡では中期後半の集落が営まれた。また、中期になると北押川・墓ノ段遺跡と上堤池遺跡で集落が成立している。向野池遺跡は建物遺構が未発見ながら、早期や中期の遺物が確認されている。

次に、時期毎について述べていく。

早期：この時期は、遺跡数が著しく少ない。建物遺構は確認されておらず、中位段丘上の平岡遺跡と扇状地の向野池遺跡で遺物がわずかに出土している。一帯の進出が丘陵や高位段丘ではなく、中位段丘から扇状地といった比較的広い平坦な地域に限定されている点が特徴的である。集落については、実際の建物遺構が確認されているわけでは無いので、不明な点が多い。

前期：この時期になると中位段丘から扇状地にかけて集落が出現し始める。前葉から中葉にかけては明確な建物遺構が無く、平岡遺跡と北押川C遺跡から土器などの遺物片が出土している。後葉になると平岡遺跡で拠点的集落が出現する。建物の配置は規則的で同心円状となるいわゆる環状集落として成立する。出土遺物では土器や石製品などがあり、石製品とりわけ玦状耳飾の出土が他の遺跡と比較して多く出土している。他に北押川C遺跡で堅穴建物を中心とする小集落が営まれている。

中期：前段階までの中位段丘から扇状地に分布していた遺跡群が、丘陵・高位段丘へ急速に展開していく時期に相当する。特に高位段丘への進出が著しく、中心的集落として開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡があげられる。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は掘立柱建物4棟、堅穴建物75棟が確認されている。建物群の配置は平岡遺跡のように環状になる要素は見当たらないが、出土遺物には土器以外に琥珀玉など交流によって遠方からもたらされた貴重な遺物が出土している。その他に開ヶ丘中山Ⅲ遺跡や池多南遺跡などの小集落が高位段丘上に展開している。中期後葉に至ると開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の終焉により、高位段丘に展開し

ていた遺跡群が衰退していく様相が看取され、再び低位段丘や隆起肩状地の池多東遺跡や上堤池遺跡といった小集落に移動・拡散していく。野下・新開遺跡の落とし穴状土坑はこの時期（後期前葉の可能性もある）の所産と考えられる。

後期：中期と比較して遺跡数が激減する時期である。特に前葉から中葉にかけては、遺跡の空白時期があり、遺物についてもほとんど出土していない。後期後葉になると丘陵・高位段丘上に再び遺跡が進出し始める。開ヶ丘中山I遺跡でも小集落が営まれている。また、肩状地では杉谷67番遺跡でも終末頃に遺物が確認されており、北押川C遺跡でも遺物が確認されている。

晩期：建物遺構が確認されたのは高位段丘の開ヶ丘中山I遺跡で、晩期後葉の小集落である。丘陵・高位段丘では建物遺構は未発見ながら、他に杉谷古墳群、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡がある。中位段丘では野下・新開遺跡や平岡遺跡で遺物の出土が認められている。低位段丘・隆起肩状地では境野新遺跡、杉谷67番遺跡、御坊山遺跡で遺物の出土がある。

以上のことを踏まえて、周辺遺跡の様相における画期についてI～IV期に分けてまとめてみる。

第I期：早期から前期で、中位段丘・肩状地への進出と、拠点的集落である平岡遺跡を中心とする母村的形態の成立で特徴付けられる。

第II期：中期前葉から中葉で、中位段丘・肩状地から丘陵・高位段丘への進出。従来の平岡遺跡母村的形態が開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡へとシフトし、さらに分村の小集落も増加する。当該地域一帯の最盛期とも言うべき時期。しかし、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は平岡遺跡のように集落プランが顯著ではなく、環状に建物が配置されることも無く、散在的に住居が作られている点が大きく異なる。

第III期：中期後葉から後期中葉で、母村的形態が解体・縮小化し、さらに後期前葉になると集落が著しく衰退し、空白時期を迎える。

第IV期：後期後半から晩期で、再び一帯に集落が営まれる時期。集落の成立は早期～前期にかけての母村を中心とした形態ではなく散在的に成立していることが大きな相違点である。

最後に、野下・新開遺跡の位置づけとして、多くの落とし穴状土坑が確認されることから、縄文時代中期（第3期）に小集落の池多東遺跡や上堤池遺跡の人々の狩猟の場であったと推定される。また、縄文時代晩期（第4期）の具体的な遺構としては土坑であるSK167のみが確認されており、集落の縁辺部として何らかの形で利用されていたと推定される。

2 古代の焼壁土坑について

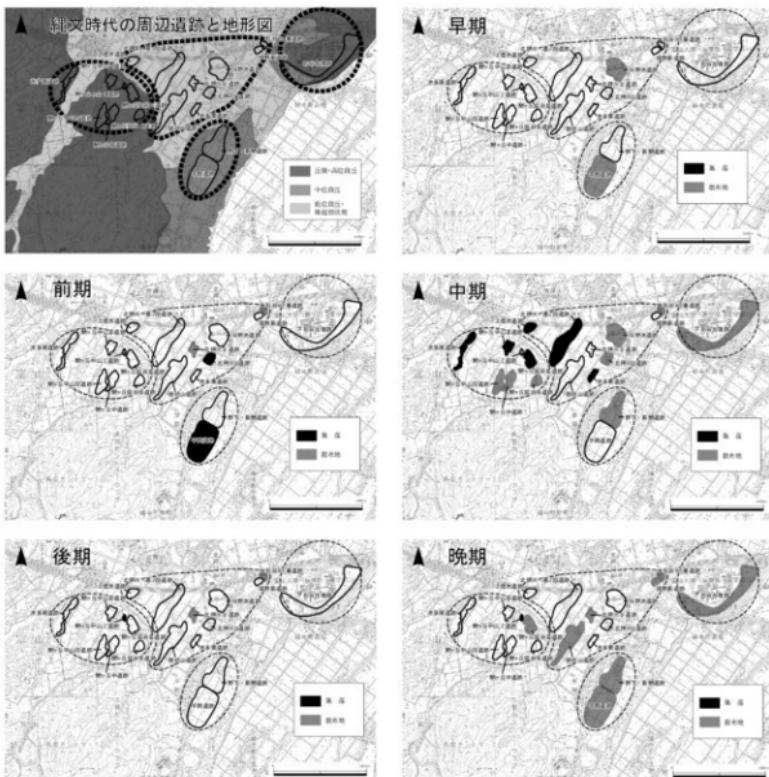
今回の調査では焼壁土坑が8基確認されている。配置には規則性は無く、平面は円形を呈す。法量は径0.94～1.39mで、深さ0.11～0.33mである。壁には被熱による赤色化が著しい。埋土からは出土遺物は無く、多量の炭化物を多く含む。周辺遺跡では、池多東遺跡、北押川B遺跡、北押川C遺跡、向野池遺跡などで確認されている。焼壁土坑の用途としては、炭焼窯、土師器焼成窯、火葬墓などが推定されている。遺物が出土していない、炭化材が多いことなどから伏焼法の炭焼窯と推定される。時期については遺構埋土内に含まれていた炭化物を放射性炭素年代測定法（AMS）により年代を求めた。その結果、A地区のSK130は693-855calAD、B地区のSK340は773-891calAD、SK371は671-770calAD、SK401は721-885calAD、SK611は661-768calADであった。これらの年代観は、周辺遺跡から得られた年代と同様の結果（概ね7世紀後半～9世紀代）で整合的である。

周辺には製陶・製鉄・製炭に関連した遺跡が多く分布している。北押川B遺跡では8世紀～9世紀

地 形	遺跡名	早 期		前 期		中 期		後 期		晩 期		備 考
		I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期	X期	
丘 陵	杉谷古墳群											
高位段丘	関ヶ丘氣谷Ⅱ遺跡											
	関ヶ丘氣谷Ⅲ遺跡											
	関ヶ丘山Ⅰ遺跡											
	関ヶ丘中山畠遺跡											
	関ヶ丘中古跡											
	関ヶ丘中遺跡											
中位段丘	野下・新開遺跡											
	平岡遺跡											
低位段丘・ 隆起扇状地	北押川Ⅰ遺跡											
	北押川Ⅱ遺跡											
	池多東遺跡											
	向野池遺跡											
	坂野新遺跡											
	杉谷67番遺跡											
	御坊山遺跡											
	北押川・藤ノ段遺跡											
	上堤池遺跡											

●はりつしは施設内の集落を、実線は建物遺構が確認された道路を。破綻は建物遺構以外の遺構並びに遺物が出土した道路をそれぞれ示している。

第34図 周辺遺跡の消長



第35図 周辺遺跡変遷図

の炭窯や製鉄炉が確認されており、向野池遺跡では9世紀後半～10世紀中頃の掘立柱建物に鍛冶炉が伴う生産工房群が展開する。野下・新開遺跡で検出された焼壁土坑も製陶・製鉄・製炭に利用されていたと推定される。

注

- 注1 古川知明 2005「落とし穴状遺構の一解釈—中世における戦略的落とし穴—」『大境』第25号 富山考古学会
- 注2 富山市教育委員会 2003『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書—主要地方道新添平岡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 注3 富山市教育委員会 2008『北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）—』
- 注4 日聖祐輔 2009「落とし穴状遺構について」『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）—』富山市教育委員会
- 注5 SK183のみ微凹があり、平坦と言えるかどうかは疑問が残るが、開ヶ丘中遺跡のように明瞭な小穴が分布しているケースとは明らかに異なる。
- 注6 稲田孝司 1993「西日本の繩文時代落とし穴」『論苑考古学』天山舎
- 注7 注3と同じ
- 注8 注4と同じ
- 注9 富山市教育委員会 2009『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）—』
- 注10 富山市教育委員会 2006『富山市向野池遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 注11 富山市教育委員会 1985『富山市野下遺跡 発掘調査概要』
- 注12 富山市教育委員会 1987『富山市開ヶ丘谷Ⅰ遺跡 路面煙蒂帯総合土地改良事業に先立つ発掘調査の概要報告』
- 注13 富山市教育委員会 2002『富山市開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘谷遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）—』
- 注14 平成13年度調査では直線的に配置された推定井戸跡として報告されているが、平成19年度の調査でその続きが確認された。遺構の配置、放射性炭素年代及び理化学的分析結果などから、「繩文時代の落とし穴と考えるのが妥当ではないだろうか」と修正されている（渡辺大士、2008「北押川C遺跡の推定井戸跡について」『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会）。
- 注15 富山市教育委員会 2000『落とし穴状遺構について』『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）—』
- 注16 山崎健他 2014「脊椎動物遺存体」『小竹貝塚発掘調査報告書』公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 注17 富山市教育委員会 2009『富山市北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）—』
- 注18 富山市教育委員会 2008『富山市北押川B遺跡発掘調査報告書—呂羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—』

引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1984『羽咋市柳田シャコデ遺跡』
- 今村啓爾 1967「繩文時代の階穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化27』物質文化研究会
- 今村啓爾 1983『階穴（おとし穴）』『繩文文化の研究 第2巻生業』雄山閣出版株式会社
- 富山県教育委員会 1973『富山市杉谷（67・81・64番）遺跡』
- 富山県教育委員会 1983『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第5次緊急発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2000『御坊山遺跡・富山市内道路発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2001『富山市開ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）—』
- 富山市教育委員会 2001『富山市向野池遺跡発掘調査報告書—（仮称）富山西IC緑地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 富山市教育委員会 2002『富山市御坊山遺跡発掘調査報告書—ふるさと農道整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 富山市教育委員会 2002『富山市境野新南II遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書—市道境野新池多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 富山市教育委員会 2002『富山市開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘谷遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）—』
- 富山市教育委員会 2002『富山市開ヶ丘向野池遺跡発掘調査報告書—主要地方道新添平岡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）—』
- 富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（6）—』
- 富山市教育委員会 2004『富山市開ヶ丘谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（7）—』
- 富山市教育委員会 2004『富山市開ヶ丘谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（8）—』
- 富山市教育委員会 2005『富山市池多南遺跡・池多南II遺跡発掘調査報告書—県営煙蒂帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（8）—』
- 富山市教育委員会 2012『富山市本桜遺跡確認調査報告書—主要地方道小杉舘中線道路改築事業に先立つ確認調査報告書—』
- 富山市教育委員会 2014『富山市内遺跡発掘調査概要』
- 富山文化研究会 1975『富山市鶴谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』法政大学出版局
- 直良信夫 1968『狩獵 ものと人間の文化史2』法政大学出版局



航空写真

1. 1946年 米軍撮影 2. 1972年 国土地理院撮影

図版2



航空写真

2009年 国土地理院撮影



1



2

A地区 速景・全景

1. 速景(南から) 2. 全景(直上)



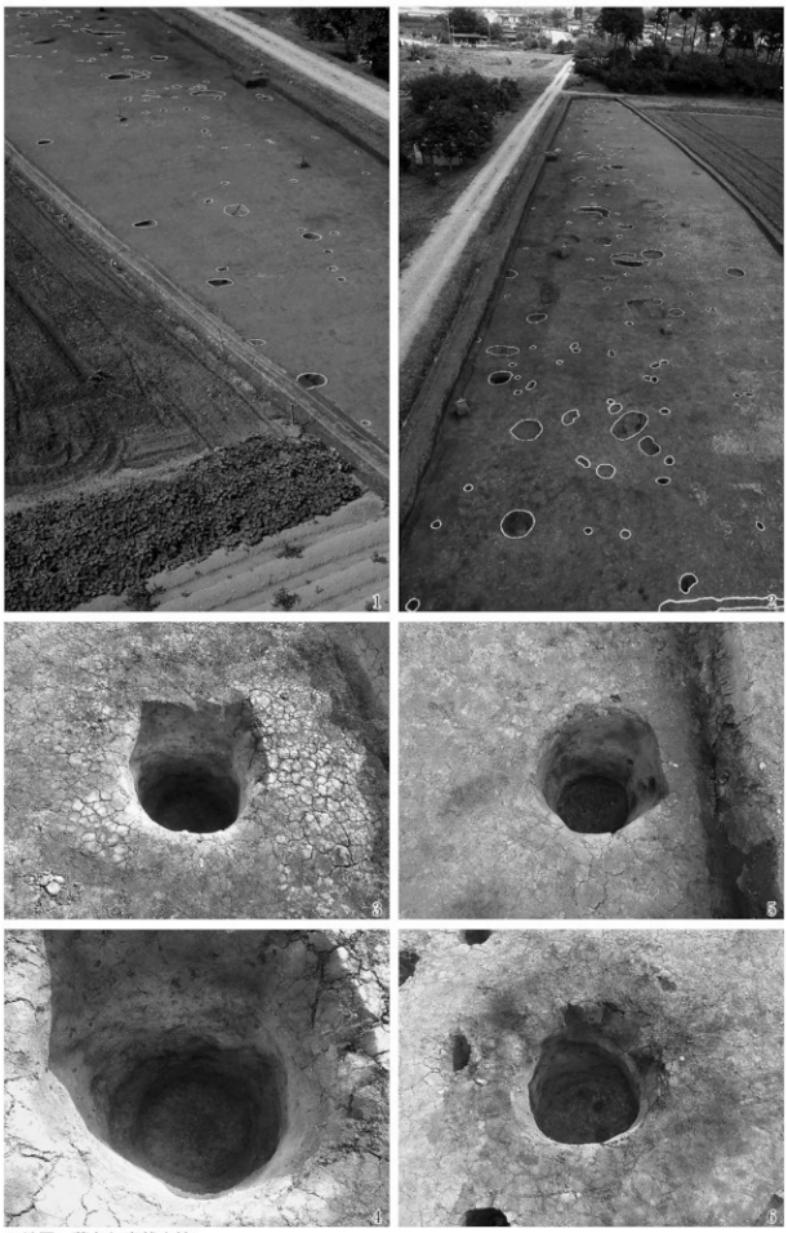
1



2

A地区 全景

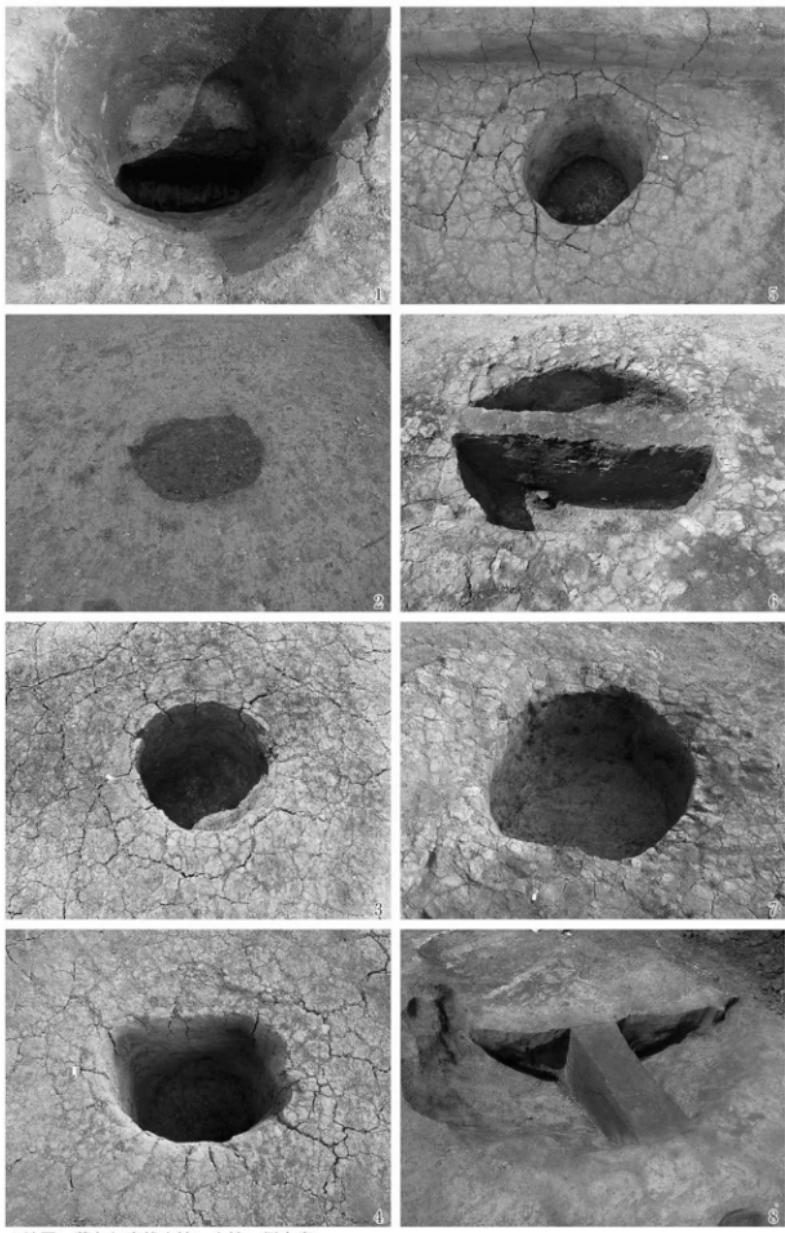
1. 全景（北から） 2. 全景（南から）



A地区 落とし穴状土坑

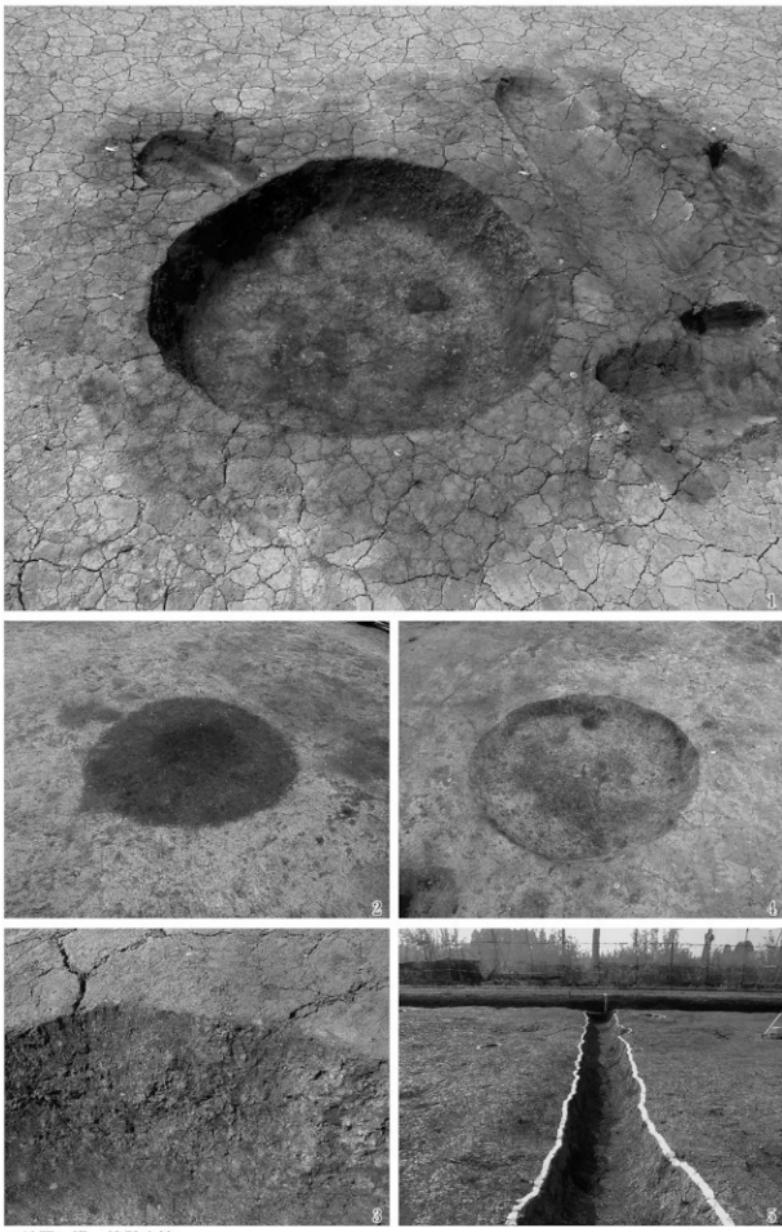
1. 落とし穴状土坑A列（北から） 2. 落とし穴状土坑B列（南から） 3. SK162（北から） 4. SK162（北から）
5. SK179（西から） 6. SK183（北から）

図版 6



A地区 落とし穴状土坑・土坑・倒木痕

1. SK186（西から） 2. SK190検出状況（南から） 3. SK190（北から） 4. SK191（北から）
5. SK193（西から） 6. SK167（西から） 7. SK167（北から） 8. SX71（北東から）



A地区 溝・焼壁土坑

1. SK130（北から） 2. SK130検出状況（北東から） 3. SK130被熱状況（北から） 4. SK85（南から）
5. SD161（東から）

図版 8



B地区 遠景・全景

1. 遠景（南から） 2. 全景（直上）

2



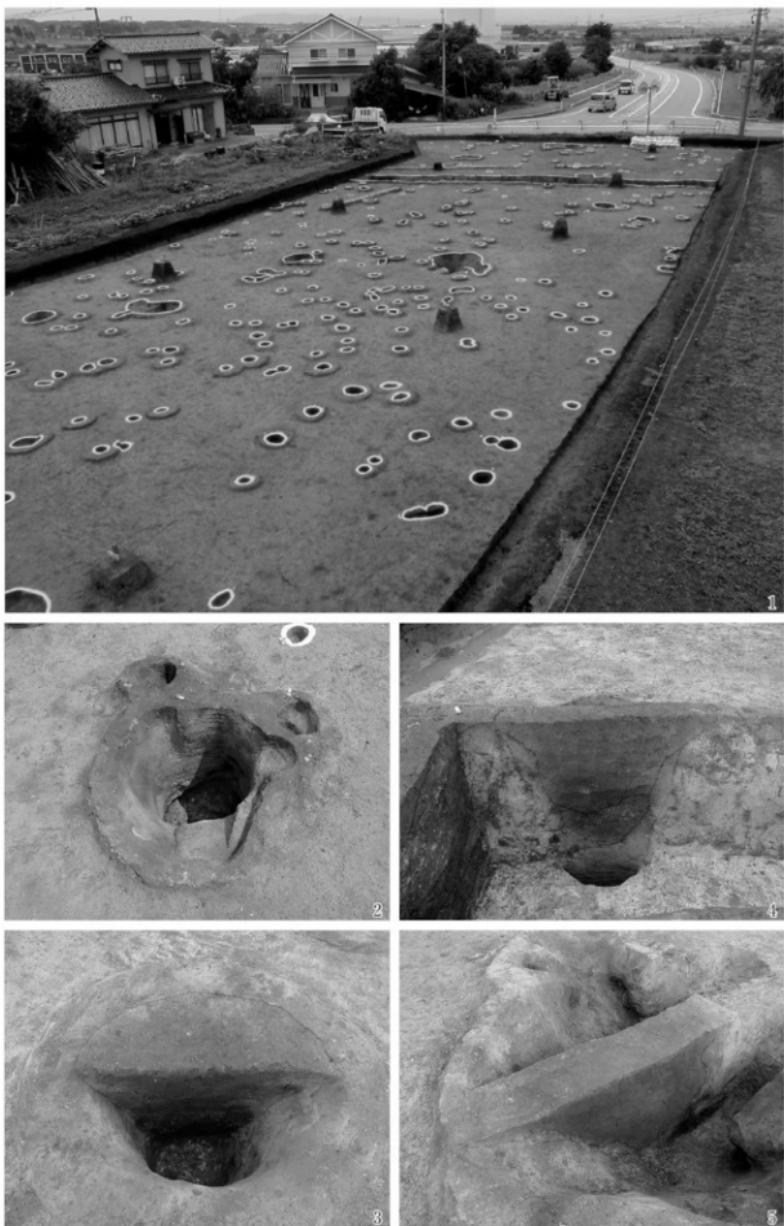
1



2

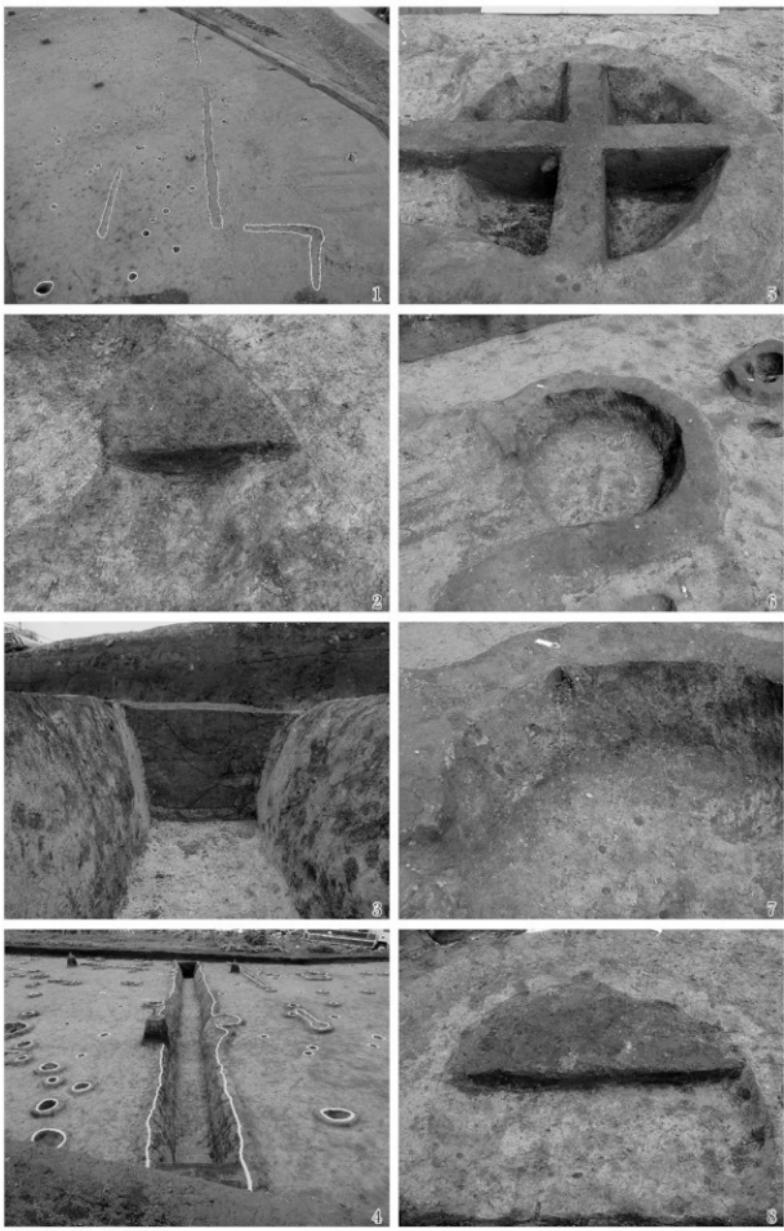
B地区 全景

1. 全景（北から） 2. 全景（南から）



B地区 落とし穴状土坑・倒木痕

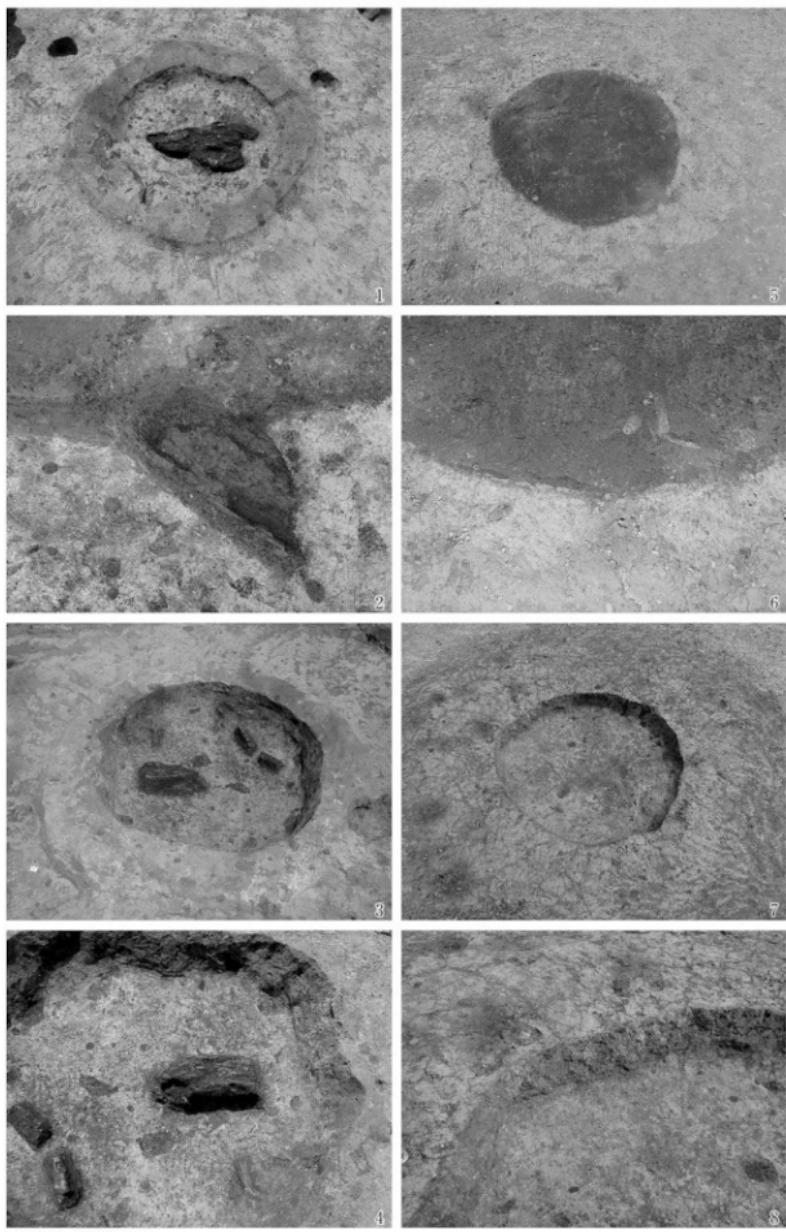
1. 北側ブロック（南から） 2. SK714（南から） 3. SK808（南西から） 4. SK832（南から）
5. SX724（北から）



B地区 溝・焼壁土坑

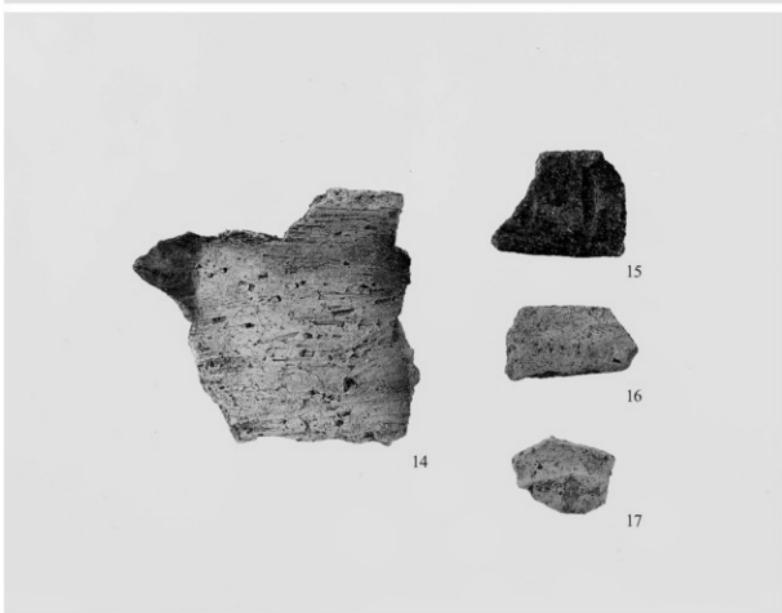
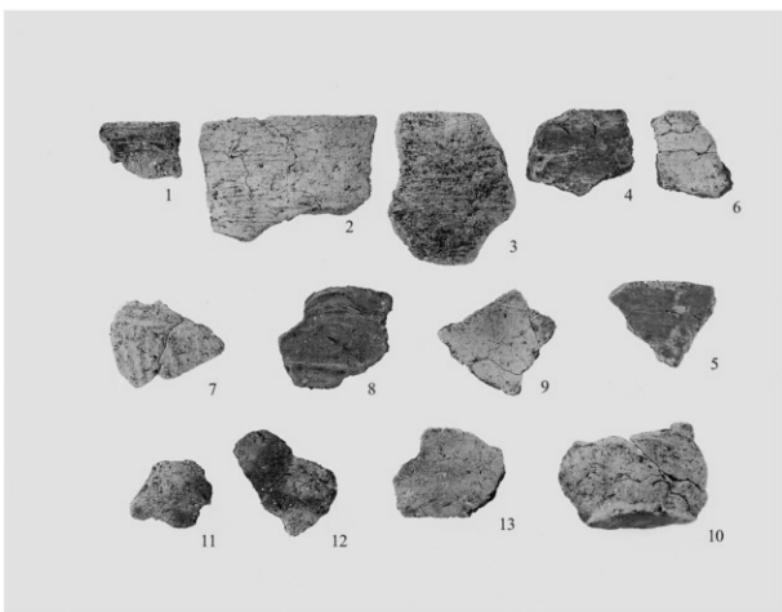
1. 南側ブロック（南から） 2. SD550（南から） 3. SD833bセクション（西から） 4. SD833（西から）
5. SK340（南から） 6. SK340（南西から） 7. SK340被熱状況（南西から） 8. SK372（北から）

図版12



B地区 燃壁土坑

1. SK371(北から) 2. SK371炭化材出土状況(東から) 3. SK611(南から) 4. SK611炭化材出土状況(北から)
5. SK401検出状況(北から) 6. SK401被熱状況(西から) 7. SK401(北から) 8. SK401被熱状況(北から)



縄文土器
SK167 包含層



22



24



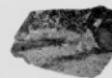
23



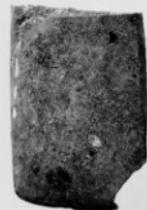
25



26



27



19



18



20



21

報告書抄録

ふりがな	のじた・しんかいいせきはくつちょうさはうこく							
書名	野下・新開遺跡発掘調査報告							
副書名	主要地方道小杉輪中線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	II							
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第70集							
編著者名	鳥田亮仁							
編集機関	公益財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229							
発行年月日	西暦2016年3月11日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
野下・新開遺跡	富山市 平岡・ 境野新	16201	523 (旧No:201468,201469, 362099,362012)	36度 67分 18秒	137度 12分 99秒	20130701～20130820 20140611～20140724	5,220	主要地方道 小杉輪中線道路 改良事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野下・新開	集落	縄文	落とし穴状土坑15基, 土坑1基, 倒壊木痕5基	縄文土器, 石製品	狩猟に使用されたとみられる落とし穴状土坑が確認された。			
		古代以降	焼壁土坑8基, 溝10条, 土坑650基以上	土師器, 頸恵器, 近世陶磁器	古代の焼壁土坑を確認。			
要約	野下・新開遺跡は、富山県のはば中央部を南北に連なる呂羽丘陵と射水丘陵の間の段丘上に位置している。周辺には平岡遺跡、池多東遺跡、北押川C遺跡など多数の遺跡が集中し、特に南接する平岡遺跡は縄文時代前期後葉に営まれた環状集落であることが判明している。野下・新開遺跡の縄文時代の遺構は希薄で土坑や落とし穴状土坑がわずかに認められる。また、土器などの出土遺物も少量であることから、集落の縁辺部であり、狩猟の場であったと推定される。古代以降では古代の焼壁土坑が確認されており、遺跡内では、製陶・製鉄・製炭に関連した遺構が展開していたことが推定される。							

2016（平成28）年3月7日 印刷

2016（平成28）年3月11日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第70集

野下・新開遺跡発掘調査報告

— 主要地方道小杉婦中線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ —

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 曰 シ ダ 印 刷 株 式 会 社
(本社) 〒921-8546 石川県金沢市御影町19-1
TEL 076-241-2141
(富山営業所) 〒939-8213 富山市黒瀬447-1 アルビトロJ102
TEL 076-493-3321